
閃光のプロキオン

ジェフティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光のプロキオン

【Nコード】

N6407X

【作者名】

ジェフティ

【あらすじ】

今から17年前。東京を壊滅させる程の何か起きた。都市は破壊され、日本は17年の歳月を経て首都を長野県へ移した。しかし、『何か』がもたらしたものはそれだけでは無かった

第一話 犬の先駆 プロキオン

プロローグ

17年前。日本は未曾有の危機に陥った。東京で起きた「何か」によって首都の機能は全て止まって国の運営は再起不能だと言われた。それからいろんな国の人たちにお世話になって今では東京は第一級封鎖区画と名前を変えている。

こんなこと今では中学生。いや、下手したら小学生でも知っているような知識だ。

首都は長野県に移され、日本はようやく再び歩きだした。

第一話 犬の先駆 プロキオン

「こら、瀬田！何やってる！」

スコン。頭に何かが当たったような感覚がする。僕は何事かと思つて上を見上げると仏頂面の先生が立っていた。その手には丸めた日本史の教科書があつて僕はそれに殴られた。

どうやら僕は眠っていた。前の席の西 涼介が僕のほうを振り向いて笑う。何だと思つて頬に触ると凹凸のような物が感じられた。顔にシワが出来たのだ。

涼介を原因に始まった笑いはクラス中に拡散し、先生はイライラを募らせる。とうとう怒りが頂点に達したのか先生はチョークを黒板に叩きつける。

「いいか、続きからやるぞ。17年前の『何か』が発生した後、東京探査探査班として」

僕は頬のシワを隠すように触れながら窓を見た。僕の席は窓際では

ない。窓際の横の列、その一番後ろだ。しかしながら僕の隣は空席で既に半年はその席の持ち主が現れたことは無かった、確か長門さんがったかな？

物思いにふけっている間にも授業は進んでいる。東京探査班。東京が壊滅した理由を解き明かすべく相模原宗介という科学者がいるんな人を引き連れて東京に向かった。けれども第6回の東京探査班で班員は皆行方不明になった。確か昨日の予習で読んだ内容はそんな感じだった。

5時限目の社会が終わり、掃除当番だった特別教室を適当に箒ではくと僕は教科書類の入ったカバンを肩にかけて隣の教室である2年4組の廊下に立った。ややあって教室の中から茶髪の髪の長い少女が急いでカバンを持って僕の方へ駆け寄る。

「ゴメン、待たせた？」

「いいや」

そう言っ僕らは歩きだした。

僕と彼女、「雀野 愛菜」は恋人でもなんでもない。ただのご近所さんだ。訳あって家に親の居ない僕は彼女の家になかば居候の形で住ませてもらっている。その理由はというと僕の親父は軍人だからだ。それも全て東京で起きた「何か」が関係している。

突然遺伝的変異凶暴化生命体。変異体とかMFLと呼称される奇形の生物が17年前から大量発生し始めた。遺伝的な影響で凶暴化した生物は人々を襲い、二次災害を引き起こした。これも昨日日本史の教科書で読んだことだ。始めはアメリカに頼っていたけど今では自衛軍が本格的にMFLの駆除を始めている。

時折この新長野市にも現れることもあったりするぐらいで親父の勤め先のVMFLという部隊が出動しているらしい。

下駄箱で靴をはきかえると校門前の駅には既に電車が止まっていた。

新長野市は再開発によって交通網が発達した。学校などの施設をいっばいつくるよりも交通網を発達させた方が安上がりだからだ。

僕と愛菜は電子定期券を改札にタッチさせるとホームへと向かった。新長野第三高校駅はさほど広くはない。僕らは止まっていた電車に駆け込むと満席で座席は諦めて奥の窓際に背中をもたれた。

「間も無く発車します」

アナウンスが流れ、警笛が鳴ると数秒してから電車が発車した。

ガタンガタンと一定のリズムを刻んだ揺れが僕を眠りへと誘うが夕暮れの強い日差しがそうはさせてくれなかった。

「ねえ、今日の夕飯は何がいいかな？」

愛菜がツンツンと僕の制服をつつきながら言った。

「そうだな」

両手を組んで考える。無難にカレー……いや、ハンバーグか……

すると先程の列車の揺れとは比にならない震動が響いた。強い地震でも起きたのかというような強い揺れが。

「最近……多いね」

愛菜が窓を見ながら言った。僕は愛菜の視線の先を追う。町の中で黒い煙が上がっている。

「またMFLか……」

慣れというのは怖いもので地震に日本人が慣れているように現存している巨大都市の中で一番東京に近いこの長野にはよくMFLが現れた。

サイレンが鳴った、予め列車に取り付けられたものだ。

「新日本政府よりお伝えします。現在、新長野市B7ブロックにてMFLが出現しました。よって、この列車は通常運行を中止しシエルトーに向かいます。ご了承ください。繰り返し」

バチンと音が鳴った。その途端に電車が大きく揺れる。いつもの路線から緊急時避難用の路線に変更されたのだ。

電車の中にいた人たちも慌ただしくなった。いつもは冷静なはずなのに僕も今日は妙な胸騒ぎがした。

「ねえ、大丈夫……よね？」

愛菜が僕の服を引っ張って言った。するとマナーモードにしておいた僕のケータイが震えた。先程から妙な感じがしていた所に電話が鳴ったのでやけに怖かった。

ポケットから取り出して電話ににでる。掛けてきたのは涼介だった。「どうした？」

僕が呑気にそう聞くと涼介は息を切らして答える。

「どうしたもこうしたもねえさ。ったく、緊急時回線に変更される前につながってよかったぜ」

「で、何の要件だ？MFLが来てるんだろ、逃げなくてもいいのか？」

「そんな事してられっか！自衛軍の新兵器を拝むチャンスなんだぞ？前々から噂になってたけど緊急時にしか使わないって言われてたしな。外見てみるよ、そこら中MFLだらけだぜ」

涼介がそういうので僕は反対側の窓をみた。おかしい。真っ暗だ。光が一切差し込んで居ない。

「……まさか！」

その黒いものが途端に動いた。液体のような物を列車に塗りつけながら。

列車の中はさらにパニックに陥った。満員電車じゃなかったのが幸いだ。

「ねえ大ちゃん……あれってMFL……」

ギロリ。何かが睨んだ。黒い物体から見開かれた赤い眼球が僕らを睨みつける。

「伏せろおおおおオオオッ！」

無理やりに愛菜を床へ倒す。その刹那、何かを切り刻むような音がして電車が大きく揺れた。大きくなってレベルじゃない。転がった。二、三度壁や床に背中を打ち付けるとようやく列車は動きを止める。僕は窓を見た。破られたガラスは血が滲んでいて既にそこにMFLの姿は無かった。

携帯を見る。通話は涼介の方から切れていた。

「……そうだ、愛菜！無事か？」

ハッとして愛菜を探した。良かった。すぐ僕の近くにいた。

「大丈夫か愛菜？」

「うん、ちょっとぶつけたみたいだけど」

白い足には青痣が出来ていた。

「立てるか？」

「うん」

彼女はそう言いながらも僕の手に乗まって腰を上げる。

酷い有様だ。生き残った人たちは必死に連絡を取ろうとしながら壊れた電車から出ていく。車体は真つ二つで一部火が出ている。これは爆発してもおかしくない。

「愛菜、早くシェルターに行こう」

愛菜の手を引っ張ると僕は凹んだ扉を外して外へとでた。

「戦況報告を」

プシュツと音を立て、近未来的な雰囲気的巨大な部屋に男が入った。男は瀬田浩三。VMFLの司令官。

たくさんモニターとランプ、そして人間がひしめきあうその部屋には警報が鳴り響く。

「現在MFLはB7ブロック、D14ブロックより進行中。第七次防衛ラインにて機構中隊が交戦中。戦局は劣勢です」

瀬田が一番上の真ん中の席に座ると肘を突き、考える。

「増援を出せ。これ以上の被害は許すな」

部屋にいたオペレーター達が「了解」と答える。その声が重なり、瀬田の耳に届く。

「ほっ、同時に二体とは異例ですね」

「……鎚木教授か」

白衣を着た男が何時の間にか彼の後ろに立っていた。

「どうするんです、瀬田司令。プロキオンはもう準備出来ておりませんが」

「まだ最終テストが残っている筈だ。出撃は出来ない。それにシリウスの二の舞にしたいくはない」

「今度はそうはさせませんよ」

白衣の男はそう言う瀬田の前に立ってニヤリと笑ってみせた。

「どうなつてんだよ……」

僕は言葉を失った。町の一部。B区画と呼ばれる商業施設の立ち並ぶここは火の海になっている。

「大ちゃん、シエルターが……」

崩壊している。崩された娯楽施設によって封鎖されたシエルター。そして前には火の海。前に進むなんて出来ない。でも何処に逃げればいいんだ……

「……そうだ、父さんから貰ったID」

思い出す。父さんがいざとなったら軍施設に逃げ込めと言っていたこと。そしてその時に僕用にIDカードを作ってくれたこと。僕の記憶が正しければカバンのなかにある財布に入っているはずだが……

「大ちゃん!」

愛菜に名前を呼ばれて考えが吹き飛んだ。それと同時に、僕らの後ろには巨大な生物がいた。犬のような四本足とイソギンチャクのような触手、顔からは唾液があふれ出ていて赤く染まった目で僕らを見つめる。

「愛菜、逃げるぞ!」

手を取って走る。でもあんな化け物からどうやって逃げろって言うんだ。今日は本当にどうかしてる。父さんは何をやってるんだ。

すると目の前、パチンコ店に止められたバイクが目に入った。バイクには鍵が掛かりっぱなしで近くには血溜まりと腕のような物が転

がつている。僕は吐きそうになるのを必死に堪えてバイクに乗った。

「愛菜！早く！！」

「でも、大ちゃん免許なんて」

「そんな事言ってる場合かよ！」

僕は愛菜が後ろに座った事を確認すると途端にアクセルを全開にした。不安定な前輪が持ち上がって急加速をする。それから少しして車輪は地面へと着く。

しかし、僕らの状況は変わらない。後ろには巨大なMFL。彼らは殺人衝動し駆られた醜い生物。父さんはそう言っていた。けど今の状況で僕にはそれが醜くなんて見えなくて恐ろしく見えてたまらなかった。

「クソッ、なんだアイツ。なんであんなに早いんだよあ！」

諦めるように声を出した。急加速をしても振り切れないし、モノレールのレールにぶつかっても何事も無く襲ってくる。

「自衛軍は何を」

僕がそう言った途端、交差点を疾走するものがあつた。グレーと白黒の混ざった市街地迷彩に塗装された小柄な戦車。VMFLが正式採用している高機動戦車。と涼介が熱く語っていたつて。

助かった気分だった。でもそうでもない。標識には『VMFL本部まで1km』と書かれている。もうここまで来ていたのかと半ば呆れてしまう。

「おい坊主！さっさと逃げろ！」

砲手のオジサンがそう言つてMFLに弾丸を撃ち込む。疾走している僕と愛菜も耳を塞ぎたくなるような爆音が轟く。

足に一発。命中した途端に炸裂した弾丸はMFLの足を崩す。

横転したMFLを尻目に僕はもう一度アクセルを強く握る。ヘルメット無しの顔に冷たい風が通り過ぎた。

VMFL基地への看板は途中で途絶えた。勘を頼りに進むけれど確

証はないから不安だった。

ややあつて僕は地下につづくスロープを見つけた。確か前に父さんの職場を見せて貰った時はこんな感じの所から入った気がする。スロープをゆつくりと下る。ここまで来たらMFLが襲ってくる事は無い。

地下駐車上に入る。閑散とした駐車場は人っ子ひとりいない。いや、非常事態にこんな所にいるほうがおかしいのだろう。

僕はバイクを駐車場に止めると愛菜の手を引っ張ってゆつくりと下ろした。愛菜の足はガクガクと震えていた。

「確かこの辺に」

昔の記憶をたどる。駐車場の入口から奥へ進んだ所に大きめのドアがあつたはずなのだが……

「ねえ、大ちゃん。これじゃない？」

愛菜が指を指す。僕は最初、ただの壁かと思つたがよく見ればスリットが入っていた。僕も恐らくここだろうと思つて扉を開けようとする。金属の重厚な扉はそう簡単にはびくともせず、開ける時にはへとへとになった。

ずずず、と引きずつた音がして扉がしまっていく。けれども僕は目の前の物を呆然と見ていた。

「これって、涼介の言つてた」

巨大なロボット。恐らく7mぐらいはあるだろう。

「それではプロキオンの起動実験はこれから」

声が聞こえた。僕は思わず愛菜の手を引っ張つて奥の扉に隠れる。

「誰がいるのか？」

ガチャリ。聞き慣れない音がした。金属が擦れる独特のこの音。僕は仕方なしに両手を上げてゆつくりと上げて表へ出る。

「その……僕ら逃げ込んで……」

「民間人はここには入れないはずだが？」

白衣姿の男とぴちつとしたウェットスーツのような服を着た男。そのうちの白衣の男が僕に向かって銃を向けた。

「その……これっ！これです！僕、瀬田大佐の息子で」

「大佐の息子さんか……」

IDカードを見てようやく納得してくれたのか男は銃を降ろす。

「で、そちらのお嬢さんは？」

「居候先の雀野 愛菜さんで、一緒にMFLから逃げていて」

ボンッ！

途端に耳をつんざくような音がした。それからややあつて熱風が部屋に立ち込める。

「クソッ……博士、早くプロキオンを出さないと」

「ああ。その君たちは隠れている、死にたくなければな」

白衣の男の言っている通り。僕らはそれに従って奥の壁に身を隠した。

愛菜が小さくなっている。お父さんの事、お母さん事。心配することだったらいくらでもある。

もう一度爆発が起きた。今度はさっきよりも近い。音がした途端に温度の増した熱風が体を包む。

「……愛菜。僕、ちよつと見てくる」

そう言つて立ち上がる僕を愛菜は止めた。制服を引っ張つて必死に抵抗する。

「ダメだよ、ここから出たら死んじゃう！」

「うん。でも、僕だつてやれる事があるはずなんだ。僕だつてこれでも男なんだ」

そう言つて僕は無理やりに愛菜の腕をふりほどく。

『男なら誰かの為に何かをしてみる』

父さんが言っていた。その言葉が鮮明に再生される。

隔壁から出ると橋のような所に先程のスーツの男性と白衣の男性が横たわっていた。

「どうしたんですか？」などと聞かなくても原因は分かった。

白いロボットと対を為すように立つMFL。原因はコイツしかないな

い。居るはずがない。

「瀬田大佐の息子さんか……」

スーツを着た男性が僕の方を向いてゆっくりと話す。

「やめて下さい！しゃべらないでください！」

僕が必死に止めても彼は血を吹きながら話す。何が彼をそうさせるんだ。

「いいか、お前はこのプロキオンに乗れ。乗って彼女を助ける！」

「はいっ！」

言われるがまま。僕はロボットの胸にあるコックピットに乗り込んだ。戦い方なんてそんなモノは知らない。でも、誰かの役に立てるのなら

「……戦え、守るために……」

そう言うと彼は何かのスイッチを押す。その途端、ハッチが締めこ
ンソールが起動する。目の前に表示される球体型のモニターが周り
を鮮明に映す。あの男の人も、白衣の人も、隠れた愛菜も見えた。
さらに目を凝らしてみると白衣の男性はコンピュータのような物を
いじっている。

「行け、少年！彼の意思を引き継いでみせろ！」

橋がゆっくりと動き、MFLとロボットを隔てる物がなくなる。

「プロキオン……そうか、プロキオン」

悲鳴にも似たMFLの鳴き声がこだます。

「プロキオン、行きます！」

レバーを無作為に動かす。それに連動してプロキオンの腕がMFLを殴る。

「うえ……うえ……うえ……うのおおおおオオオ！」

思い切りレバーを押し込んだ。しかし、その重たい一撃は触手に絡み取られ、機体の制御が効かなくなる。

「待て……待ってくれ、どうなって」

機体がきしむ。触手に締め付けられているのだ。

ギシギシと金属がきしむ。計器が悲鳴を上げ、モニターには砂嵐が

起きる。

「クソッ！僕は結局……結局何も出来ないのかよ！！」

とくん。早かった心臓の鼓動一際強く感じる。今まで何とも思わなかった鼓動が違和感でもあるかのように感じるのだ。

『DE-S』

何の略称かは分からない。でもそのワードが砂嵐をかき消し、画面を覆い尽くす。

機体が金色し光り始める。光を放つと同時に、『DE-S』の文字を振り払われるかのように消え失せる。

「……僕にやれること。僕にしかできないこと……」

ペダルを踏み込む。バーニアが点火するよりも前に機体が目に動き出す。機体を縛っていた触手はあまりの速さに耐えられなくなったのかプロキオンから剥がれ始める。

「ちょっと、プロキオン。何やってるの！」

途端に無線が掛かった。でも僕には使い方が分からないので何も答えることができない。それよりも目の前の敵に対して無我夢中だった。

「まあいいわ、A20ブロックにてAD隊が待機してるわ。そこにおびき寄せて。いいわね」

通信が切れる。それと同時に、画面には地図と赤い点が表示される。

「ここに行けってことか！」

もう一度ペダルを深く踏み込む、細い通路を火花を散らしながら進む。赤い火花と金色の光が美しい火花のような物を作り出す。

「目標地点まであと……50、40、30……」

光が見えてきた。先程通信をしてきた人はきつとそこにいるんだろう。

「あと……20、10……0！！」

世界が開ける。夕日がモニタ差し込んだ。

それと時を同じくして多数の弾丸がMFLへと発射される。目の前には特殊な武器を装備した者達。足からはバーニアが噴出され、高

度を一定に保っている。

着弾する。その衝撃は僕にも伝わって途端に僕の集中力は切れてしまった。

へなへなと椅子にもたれかかる。先程まで押し出していたMFLはもう黒こげになっている。

終わったんだ。よくわからないうちに戦ってしまったけど僕はこうして生きていて誰かを守ることが出来たのだ。

第二話 戦闘少女

あれからは父さんが全てやってくれた。例え緊急事態だったとしても一般人である僕と愛菜が軍事機密を目にした事に変わりはない。普通なら裁判でもかけられるのかもしれないけど父さんが何とか誤魔化してくれたのだ。

コックピットからだとVMFで採用している戦闘用スーツ、AD アーマドレス を着た人にこっ 酷く叱られたりした。でも僕は目の前で死んだ人がいる、守れた命がある。それだけで手一杯で頭が真っ白だった。

それからややあって僕は愛菜といっしょに軍の人に家まで送ってもらった。愛菜の両親は二人とも無事でおじさんもおばさんも心配してくれた。

朝、ホームルームが始まる直前になって涼介が登校してきた。いつもこんな感じだけど今日はなんだか様子が違った。

「おはよう、何かあった？」

「あつたさ、昨日の騒ぎ覚えてないのか？」

「そりゃ覚えてるけど……」

というかこのクラスの中で一番僕が知っているだろう。今、改めて自分が何をしたのか考えるとゾツとする。

「んで、警戒網をぐぐり抜けて撮ってきた戦利品がこれよ！」

そう言つて涼介はぺたんこのカバンから写真の束を取り出す。僕は涼介からその束を受け取ると一枚一枚ゆっくりと見始めた。

「これって自衛軍の戦車？」

「ちつつちつ。二三式特殊機動戦車。普通の戦車と間違えて貰っちゃ困るぜ」

「ふーん」と適当に相槌を打ちながら写真を見ていくとなんと僕と

愛菜が逃げるところが写った写真まであった。

「おっ、その写真は撮るの大変だったんだぜ。なんたって目の前にMFLがいたんだからな。いやぁ〜それに向かって120mm滑空砲を撃つ二三式の勇姿！お前にも見せたかったぜ」

「ああそう……」

というかその二三式をくぐり抜けたバイクが僕なんだが涼介は全く気づいちゃいなかった。

「これは？」

一枚、空を撮った写真を差し出す。

「あー、これはADを取るために連写した時の奴だ。確か4枚目に

」

そう言っただけは僕から写真の束を取ると手馴れた動きで写真を探す。

「あー、あつたあつた。これだよ」

机に差し出された写真をみる。映っていたのは装甲のような物を身に付けた少女だった。足からは眩い光を放つバーニアがあつて、腕にはアサルトライフルを構えている。

「AD隊ってこんな子小さい娘もいるんだな……」

僕がそう呟くと涼介は途端に黙った。さっきまで軍事関係の知識をあれよあれよと披露していたにも関わらず口をポカーンと開け、目を見開く。

「あの……俺何か言っただ？」

「言っただとも……ああ、言っただともさ！お前AD部隊のアイドルにして最強のAD使い、長門 流希さんになんてこといつてんだ！！」

ガシガシと襟首を掴まれ、縦、横、斜めに振り回される。目が回りながらも僕は必死に止めようとするが涼介は何か喋りながら僕を振り回す。

「止めッ、涼介……っし……死ぬう……」

首を締められ、死にそうになった途端、教室にガラガラという音が

響いた。

「こら、西！さっさと席につけ。ホームルーム始めるぞ」

担任の伊藤先生ががに股でガツガツと涼介に近寄り、得意の怪力で強引に席へ座らせる。賑やかだった教室は静まって陰悪ムードになった。

ホームルームが終わり、チャイムが鳴る。昨日の一件で政府からの連絡がたくさんあつてホームルームは結構間延びした。いつもはチャイムがなる前には終わるというのにギリギリだ。

ファイルに挟んだ予定表を見る。一時間目は……古典か。また嫌な授業が朝から来たもんだ。

僕は引き出しから教科書、参考書、ノートを取り出して机に置く。それと同時にチャイムが鳴った。もう授業が始まるのだ。古典の担当である西東先生が既に教卓に立っている。

「起立。」

日直の女子生徒が爽やかに言った。続けて礼に着席と相変わらずな号令を済ませて授業が始まる。

「あー、今日は57ページから」

パラパラと教科書をめくる。いまだき全く目にしない言葉が並ぶので正直頭が痛い。というか古典つてやる必要があるのかと思う。

僕はパラパラと肩肘を突き、あくびしながら西東先生の指示した57ページを開こうとすると教科書の間からパラリと何かが落ちた。写真だ。

「これって……」

女の子の写真だ。確か長門 流希とか言ってたっけ？そういえば涼介が伊藤先生に強引に連れてかれたので返し忘れたのだった。

にしても可愛い娘だと思った。昨日、プロキオンに乗っていた時は無我夢中で周りが見えていなかったから顔はよく覚えていないけど、こうしてまじまじと見れば可愛いなと思った。

「長門 流希……」

思わずその名を口に出した。

黒髪を二つに縛り、勇ましく戦う姿。一瞬を写したその写真には彼女の全てが収められているような気がして

「待て、長門 流希……」

何かが引つ掛かった。記憶の片隅。彼女の名前が。

「……………あぁッ！」

声を上げ、机を叩く。椅子をガラガラと足で動かし、僕は立ち上がった。

「……………どうした、瀬田？」

西東先生がポカンとした表情で僕を見る。

「あの……………その……………」

すると西東先生はふうとため息をついて肩をなでおろす。

「じゃあ、この五行目から瀬田」

「えっ？はい、わかりました」

慌てて教科書を持つ。先程立った時に衝撃でページがめくれた教科書は百何ページとかになっている。

「えーっと……………ゴホン、青葉になり行くまで」

前の席の涼介がまたも笑っている。周りからん羞恥の目から耐えながらも僕は読み切る。先生も少し半笑いだった。

席に着く。僕は隣の席、空席を見る。

長門 流希。

隣の席の所有者。記憶の片隅に残った情報が僕にそう告げた。

今日の掃除当番も終え、あとは帰宅するだけとなっていた。

僕はカバンをとって愛菜の下へ行こうと思った。すると僕のケータイが途端に震え出した。

「こんな時に誰だ……………」

ズボンのポケットを漁る。ミニ掘み取り大会が僕のポケットの中で

開催された後、お目当てのケータイ電話が手元に現れる。

非通知だった。ちよつと嫌な予感がしたけど通話ボタンを押して耳に当てる。

「もしもし……」

「私だ。大輔、元気にしているか？」

その声ですぐに分かった。父さんだ。

「どうしたの？わざわざ非通知でなんて」

「学校が終わったのならV M F Lに来て欲しい。早急にな」

僕は「うん」と答えるや否や父さんは電話を切る。もともと電話は恥ずかしいと言っていたのでやっぱりいつもの父さんだなと思った。

「大ちゃん、その」

後ろに愛菜が居た。全く気付かなかった。

「ああ、その父さんから電話があつてさ。V M F Lに来てって」

「じゃあ、今日はいつしよに帰れない？」

首をかしげて愛菜はそう言った。

「うん、そうなる　かな？」

「じゃあ、私おいしい料理作って待つてるね！」

愛菜は満面の笑みを浮かべると昇降口へと向かう階段へと掛けていった。

「さて、じゃあ僕も行かないとね」

父さんからの直々の呼び出し。嬉しいけど何か嫌な予感もした。

新長野市は大きく分けてA B C Dの四区画に分かれている。政府機関、軍事機関のそびえるAブロック。商業施設、教育施設が立ち並ぶBブロック。居住区画であるCブロック。そして他国との貿易、つまりは大きな空港が存在するDブロックに分かれる。

もちろんV M F Lは軍事施設のあるA区画に存在する。因みにA区画は僕らが住んでいるC区画とは真逆の方向で、A区画には政府関

係者、軍関係者用に小さな都市が出来ているとかで電車が殆どない。その昔の長野の電車はそれぐらいのインターバルで来るらしいけど僕にとっては不便だった。

電子定期券を財布の中から取り出す。カードのような定期券にタッチするとそこに時刻表が表示される。

「えつと……新長野第三高校駅発、A区画VMFL基地行き列車は……5時ジャスト」

携帯を見る。待受になっているアナログ時計は4時45分を指し示す。そうだ、あと15分しかない。しかもこの列車を逃したら約1時間は帰ってこない。A区画行きの列車はABCDと回っている。時間がかかるのだ。

うかつかしてられない。廊下で涼介に「ゲーセンにいこうぜ!」と誘われたけど「明日な!」と適当に返して駅へと走った。

「間も無くVMFL基地です。軍関係者の方はこちらです。Soon you will arrive in VMFL Base. Military personnel who get off here, please」

流石A区画。といった所か。外交だの貿易だのでこの列車は外国の人も利用していてアナウンスも英語が流れる。噂に聞いていたけど実際に聞くのは初めてだった。

警笛が鳴る。金属が擦れる音、即ちブレーキの音が響く。座席に座った僕の体も少しだけ横に倒れる。

「VMFL基地、VFML基地です。Arrived in VMFL Base」

プシュッとドアの開く音がして、乗っていた内のたった数人が降りていく。通勤ラッシュなんて時間でもなければA区画への列車なんてこんなものなんだろう。

すると電車を降りた僕の目に一人の男性が飛び込んだ。奇抜という

か周りのビジネスマン達にそぐわない白衣を着た男性。間違い無い。昨日、僕がプロキオンを動かした時にいた人だ。

「おっ、いたいた」

そう言っただけの人は僕の方へ駆け寄ってきた。すると途端にピースサインをしてはにかみながら「ピース」と言った。何かよくわからないけど取り敢えず僕もピースと返す。

「おお、流石DE-Sを動かした逸材。ノリもいいじゃないか全く！」

「あの……それよりも父さんが呼び出したのって……」

『DE-S』という言葉が引っ掛かったけど、取り敢えず本題であるそれを聞いた。

「ああ、司令から聞いていたか。正確には僕が君に要件があるんだ。昨日のことだね」

すると白衣の人はポケットからなにやら四角い紙切れを取り出す。

「初めまして。ではないけれど相模原遺伝子研究所の鎬木 正晴だ。以後お見知りおきを」

「鎬木さん。ですか」

名刺を受け取る、そこにはしっかりと相模原遺伝子研究所所属 V M F L 技術顧問と書かれている。

「では、自己紹介も終えた所で本題に入ろうか。瀬田 大輔君」

そう言う鎬木さんは白衣をたなびかせ、エスカレーターの方へと歩き出す。僕もそれを追う様にして歩きだした。

駅を出てすぐ、徒歩5分も無い所に巨大な施設が立っていた。ここがV M F L。昨日、僕が戦った場所である。

あれほどの戦いがあったというにも関わらず、すでにV M F Lの付近はきれいさっぱり元通りになっている。

「さあ、こっちだ。プロキオンと君の父上が待っている」

鎬木さんは正面のゲートにはいかず、回り道をするようにフェンス

際を歩いていく。フェンスには有刺鉄線があり、きつと高圧電流でも流れているのだろう。

そんな恐ろしい妄想をしていると大きなドアの前にでた。ドアというよりもシャッターというべきなのだろうか？

「さて、ようこそV M L Fへ」

ドアが自動に開く。シャフトのような物が空気が抜けるような音と共に外れ、ゆっくりとドアが開く。

すこしずつ、光が差し込む。

「さあ、これが昨日きみが使ったものだ」

人一人入れるぐらいに開いたドアの中へと鎚木さんは入っていく。僕もそれを追っかけていくとやはりそこにはプロキオンがいた。

「……プロキオン」

「そうだ、遅かったな大輔」

格納庫のような部屋に鎚木さんでも僕でもない声が響いた。

「父さん！」

「……大輔、大きくなったな」

そう言う父さんはゆっくりと僕らの方へ近づく。

「いいんですか司令？もう戻れませんか？」

鎚木さんが言う。

「ああ、覚悟は出来ているさ」

「えっと、何の話を……」

僕が二人に割り込もうとすると父さんが僕の方を向いた。その目は真剣で優しい父さんというより威厳があるという感じだった。

「大輔、今からお前はプロキオン専属のパイロットとしてV M F Lに配属される」

「……え？」

頭が真っ白になる。確か僕は昨日、成り行きでロボットを動かしてしまつて……

「やっぱり、軍事機密を知ってしまったのがいけなかったの？父さん！どういふことなのか説明してよ！」

僕が父さんの服を引っ張りながらそう聞くと父さんは冷静に頷く。それを見た鎬木さんも頷くと僕と父さんの間に割って入った。

「いいか、大輔君。君に罪はない。これは君に与えられた選択だ。お父さんの言い方はちよつと強引だったかもしれないから僕が説明するよ」

そう言つと鎬木さんはプロキオンの方をゆっくりと向いた。

「君は東京探査班は知っているかい？」

「ええ、歴史の授業で少し……」

「それなら話は早い」

そう言つと鎬木さんはプロキオンと僕らを隔てる小さなフェンスに手を掛ける。

「17年前、東京で何かが起きた。それを探るために組織されたのが東京探査班。それぐらいは知っているだろう？でも彼らは何も分からないまま第六回の探査で行方不明になった。でもそれは違うんだ。……ねえ、大輔君。このロボット、誰が作ったと思う？」

半回転して鎬木さんはフェンスによりかかると僕に聞いた。

「えつと、やっぱり戦闘機とかそういうのを作っている」

「ブッブー！ハズレです」

僕が言い終わる前にそう答えるともう一度プロキオンを見て話を続けた。

「この機体はね、東京探査班のリーダーであつた相模原宗介の設計で作られ、僕のいる相模原遺伝子研究所に保管されていた。それだけじゃない。今軍部が採用しようとしているAD アーマードレスだつてそうだ。東京で何かを見つけた相模原教授はそれを使ってこれほどの兵器を作り上げた。そしてそれを見つけた出した僕らは一体教授は何を見つけたのか研究することにしたんだよ」

「……それがDE・S」

「ザッツライ！」

僕の方を指差し、そう言つた。

「DE-S。何の略称かは知らないがそれが教授の残した遺産。けれども僕らにはその起動方法がわからなかった。だからプロキオンは兵器としての運用が見送られていた。」

暗い、不安そうな顔をして言う。すると突然明るい顔に戻る。

「でも、君が現れた！昨日のたった一度の運用で君はDE-Sをたった3%だが起動させた。これは快挙だ！機体の運動性能は2倍になった。たった3%で」

カツカツと革靴で金属の床を歩く。一回転して僕の方を向く。

「君は逸材だ。その君にしかない力を是非とも貸して欲しいんだ！」僕は父さんの方を見た。父さんはゆっくりと頷く。

「……考えさせて下さい。ちょっとだけ、ちょっとだけでいいんです。明日には決めます」

「そうか、いい返事を期待してる。その先の道が駅と繋がってる。ゆっくり考えて、君の思いを教えてください」

「……わかりました」

そう言っ僕は自動ドアを抜け、駅への連絡通路をゆっくりと歩きだした。

「軍に入れなんて、そんな事言われても……」

僕にしか出来ないこと。確かに魅力的ではある。でも……

不安なのだ。昨日、僕の前任者であった男性は僕にあの機体を託し、死んだ。あの人にだって遣した家族が居るんだろう。そう考えると胸が痛くなる。

「どうすればいいのさ……」

駅のホームに電車が入る。でもこの列車はC区画行きではない。次の列車で行ったほうが確か早く着いた気がする。

電子定期券を取り出す。時刻表を呼び出そうとしたら途端に全ての時刻表が文字化けした。

「何だ、何が起きて」

ドカン。と爆発音が聴こえる。

方向はA区画。すぐ近くだった。僕が時刻表に目を落とすとそこには「緊急事態発生。前線を避難経路に変更します」と表示される。先程の文字化けはこれの前兆だったのだ。

広告用の液晶ディスプレイもすべて避難警報へと変わる。

昨日の、人が死んでいく光景がフラッシュバックする。

「クソ……クッソォ！どうしてこんな！！」

ぼくはいてもたってもいられなくなってホームから改札を逆走した。

駅の下階。テラスのようになった所から僕は外を見た。防衛省の隣にあるV M F Lから炎が上がっている。

僕はどうすればいいのか。黙ってプロキオンに乗って戦えと言われるてもそう簡単に頷くことは出来ない。命を簡単に賭けることなんてできないんだ。

僕は臆病者だ。あの時、僕にプロキオンを託してくれたあの人に申し訳ない。

涙が溢れた。目からあふれるそれを拭こうとすると口の中に入ってしまった。しょっぱい味がした。

砲撃の音がここまで聴こえる。目を凝らすと砲塔から赤い光りが放たれるのが見える。そして二三式に対を為すように翼の生えたM F Lがいた。昨日現れたM F Lとは違い触手が無い代わりに巨大な翼が生えている。

その巨体には似合わぬ速度でM F Lは移動する。砲撃に混じって違う爆発音がした。二三式が爆発したのだ。

もう限界だった。理性とか倫理とかそういう難しい言葉で表すものじゃなくってもっと直線的で感情的な物が僕を突き動かす。何時の間にか僕の足はV M F Lへと向かっていったのだ。

道路は封鎖される。逃げ惑う役人達を掻き分け、僕は戦地へと向か

う。鉄の臭い、血の臭い、火薬の臭い。臭いの方へと僕は動く。

爆発の音が大きくなる。近づいているのだ。

何度か「君、何処にいくんだ！危険だぞ！」とか言われたけど僕はそれを無視した。危険なのはわかってるんだ。

人ごみが消えた。

目の前には無骨な戦車。上空には5、6機のヘリ。一部は煙を上げながらも戦っている。

走ったせいか息切れをした僕はフェンス越しにVMFL基地に立ち尽くした。

すると途端に隣にあったスピーカーが鳴り響く。

「AD アーマードレス 隊出撃を開始。カタパルト付近の車両、航空機は直ちに離脱せよ。繰り返す、AD アーマードレス 隊出撃を開始。カタパルト付近の車両、航空機は直ちに離脱せよ。」

警報が鳴った。爆音が響いていてあらゆる音は聞きづらいハズなのに耳を塞ぎたくなるほど警報音は大きい。

僕がスピーカーに目を奪われていると途端に戦闘機でも離陸したような音がした。にしては目の前に飛んだ物は異常に小さい。

AD アーマードレス

戦闘用の特殊装甲として開発されたというそれはウェアラブルコンピュータの発展形として『着る』戦闘機となった。

上空、雲を切り裂くように飛ぶ『彼等』その中に一際目立つカラーリングの機体がある。

真紅の機体は拒否するように空の青から浮いている。

「長門……流希……」

前に涼介が言っていた。真紅のADを操る最強の少女がいる。それが彼女。

急降下した彼女は地面にぶち当たる寸前で足のバーニアを地表に向けて全開にする。滑り込むようにMFLの4本足の中へと入り込むや否や彼女はその手にもったライフルをMFLの腹にめがけて発射した。

言葉には言い表せないような悲鳴をMFLは上げる。

「すごい……」

そうとしか言えなかった。戦車隊が幾ら撃っても倒せなかった相手をたった一回のアプローチでよろけさせたのだ。

彼女はもう一度上昇する。怯んだMFLへの攻撃は他に任せ、次のチャンスを生み出そうとしているのだ。

だが、それはうまくいかなかった。

途端、先程の射撃で怯んだと思っていたMFLが背中 of 大きな翼をはためかせて急上昇した。するとその長く鋭い前足の爪で長門を殴るようにして引っこ抜いた。

あまりに唐突の事で避けようにも避けきれなかった彼女は地面に叩きつけられるとそのまま滑るようにして僕のいる方へと向かってきた。

砂埃が立ち込める。彼女は体中傷つきながらも立ち上がろうとする。

「何よ……あんた何でこんなところにいるのよ!!」

MFLへの憎悪をぶつけるように彼女は僕にそう言いながらライフルを撃った。トリガーを引くと7・56mm弾のリコイルショックが彼女の小さな体へと響く。

「早く逃げなさい!今の貴方は只の一般人よ!たった一度皆を助けたぐらいでいい気にならないで!」

弾が切れる。彼女は急いでリロードしようとするもMFLは待つてはくれない。その強靱な爪が彼女を襲う。

「あああッ!」

甲高い声の悲鳴を上げると彼女は砂埃をまき散らしながら僕の足元に転がり込んだ。

でも、それでも彼女は戦う事を止めない。膝まづいてでも銃を撃つ。

「……クッソおおおおオオ!もう止める!!」

僕はそう叫ぶと長門さんの目の前に立った。まるで立ちふさがるように。

「何やってんのよ!死にたいの!?!」

「死にたくなんかない！でも、他人が死ぬのはもつとイヤなんだよ！！」

そう言うとは僕は携帯電話を取り出す。電話帳から急いで父さんの番号を見つけ出し、それに掛ける。すると父さんは僕から電話が来るのを待っていたかのようにたった一回にコールで電話してた。

「もしもし父さん？僕、決めたよ」

「……いいんだな？」

「うん、僕にしか出来ない事なんかじゃない。今僕に出来ることをやりたい」

「分かった、今すぐお前の目の前のA27ゲートにプロキオンを向かわせる。……守って見せるよ、大輔」

僕は黙って頷くと電話を切る。ポケットにケータイを入れると目の前の床が割れ始めた。そのせいかMFLはこれ以上僕らの方へは進めない。

でも、僕は違う。

「うおおおおおおおおオオ！！」

無我夢中でその穴の中へと走った。近づく度きゴウンゴウンという機械音が強くなる。

そして僕は飛んだ。その中　プロキオンの中へと。

僕がその中へと入ったと同時に、プロキオンのコックピットハッチは開いた。吸い込まれるようにして僕はコックピットに入る。やはり高低差があるせいかお尻が痛みがした。

目の前のコンソールに明かりが灯る。球体型のモニターが部分ごとを外を映し出す。最初は前から。そして後ろへとほんの数秒で映像として映し出す。

「後戻りはできないぞ、大輔」

モニターに通信た表示される。そのウィンドウの上には「VMFL Base」と表示されている。

「男なら、誰かの為に何かをしなくちゃいけないって。それが僕の

やるべきことなんだって」

ウィンドウが閉じた、元々父さんは人と人話するのは苦手だったので恥ずかしかったんじゃないかなと思った。

「大輔君。今、プロキオンには前の時と違って武器が付いている。わかるな？」

ウィンドウがもう一度勝手に開いて鎬木さんが話した。鎬木さんの言うとおり、モニターの右側を見るとプロキオンの右手があり、そしてライフルを持っていた。

「いいか、照準は全て君の目の動きに併せて動く。そして引き金は腕を動かすメインレバーに付いているはずだ。それを引けばあとはコンピュータが勝手にやってくれる」

僕は目をしばたたき、目の前のMFLを見つめた。それから少しして球体型モニターに丸いロックオンサイトが表示された。

敵を凝視する。汗ばんだ手でレバーを握る。

今、僕に出来ること。僕に与えられた事。

「プロキオン、行きます！」

黒かったアイセンサーが真紅に染まった。目の前のコンソールには残弾を始めとする武器の情報、メインの球体型モニターには照準がメインレバーを前に倒すと銃を構えた。僕はそのままMFLを凝視するとトリガーを強く引いた。

途端、銃口が赤く光った。それと同時に、僕の体全体が強く揺れる。

硝煙が立ち込める。空気へと消える煙には目もくれず、ただMFLだけを凝視する。

「……来た！」

羽が広がる。レバーを後ろに引くとガード体制を取る。強靱な爪は腹部にあるコックピットを切り裂こうとするもプロキオンの装甲はそれを許さない。

急いでライフルを構えると零距离で発砲する。さっきよりも強いリコイルショックが体に響いた。その振動で機体が揺れるのがよくわかる。

「大輔君、バヨネットだ！前方の兵装管理用のタッチパネルで銃剣に切り替える！」

後方のスピーカーからノイズ混じりの鎬木さんの声が聴こえる。

「タッチパネルって　これか！」

僕は無理矢理叩くようにパネルを叩いた、すると画面に表示されていたライフルの下。レールの搭載された部分から鋭利な刃物が飛び出る。

その画面と連動し、右手に持ったライフルの先端には刃物が飛び出す。

「これでえッ！」

昨日の様に無我夢中でレバーを動かす。ガンッガンッと殴りつけるような音がレバーから鳴る。

返り血が白いプロキオンの装甲について赤く染まる。

「トドメだああアアッ！！」

槍のように銃剣刺し込む。けど、手応えがなかった。

ばさっばさっという羽音が聴こえる。何時の間にかMFLは僕の遙か上空にいた。敵を切り裂く事しか考えて無くって隙を取られたのだ。

急いでコンソールをタッチしてライフルモードへと切り替え、レバーを押し込む。しかし、それよりも早く何かが僕の後ろから飛び去った。

「いい、アンタはアイツの頭を狙って。そしたら私が空中でアイツを刺し殺す。分かった？分かったなら後退して精々照準でも頑張って付けてなさい！」

ボロボロのADを着た長門さんだった。戦闘機……とまではいえないが恐らくプロキオン以上の空戦性能を持つAD。そして何より長門さんが僕よりも戦闘経験があるということを考えれば妥当な判断だ。

「分かった。出来るだけ頑張る。でも……」

「でも何よ？」

「死ぬなよ」

「誰に言ってるのよ」

長門さんはそう言うのと足のバーニアを地面スレスレで蒸かし、急上昇する。

「いい、3カウントで行くわよ。少しでも間違えたらアンタが死ぬと思いなさい」

「分かった」

敵の頭部。羽ばたくMFLはゆっくりと空中を上下する。なかなか狙いが定まらない。

「3！」

カウントが始まった。

「2！」

長門さんは上昇をやめ、下へと反転を始める。狙いはまだ定まらない。

「1！」

下降する姿勢を整える。

「0！」

電子音が耳元で鳴った。それと同時に、ロックオンサイトが赤く染まり、僕は引き金を引く。

ダダダッ！と音と共に反動がして僕は仰け反る。その刹那、羽を持ったMFLが気を失い、地面目掛けて落下を開始する。

「よくやったわ、トドメは私が！！」

バーニアの光りが青い弧を描いてADは降下する。その一秒とない間に長門さんは腰に備えたブレードを引き抜くと切っ先をMFLに向け突撃する。

ブスッという音が鳴った。MFLは血が溢れ出し、完全に活動を停止する。

「……やった。長門さんやつ」

何か。何かが引っ掛かった。何かが足りない……………

「バーニアの光が無い！？」

僕はペダルを強く踏むと背中と足のバーニアに火が点き前方に向け加速する。よく見れば長門さんは剣を引き抜こうとするも上手く抜けず、脱出を出来ないままMFLと落ちている。きつと、前にMFLに引つ掻かれた時にシステムに異常が起きたのだろう。

「長門さん!!」

僕はそう言つとコンソールを叩いて武器を離す。ペダルを踏んでバーニアを蒸すとレバーを押し込んで右手を差し出した。

「アンタ……何やってんのよ……」

プロキオンの掌。グレーの機械的な手の上に長門さんはちょこんと乗っていた。空中でホバリングし、ゆっくりと降りる。眼下には血で染まった巨大な怪物。羽の生えた奇形の犬が横たわっている。

「何って、最初に言っただろ？他の人が死ぬのは嫌だって」

僕がそう言つと長門さんは顔は動かさずに目を閉じ、大きくため息をついた。

「とんだ阿保ね」

「どこがだよ」

間髪いれずに僕は問う。しかしながら長門さんは余裕の笑みを浮かべながらやれやれと両手を上げる。

「あの時、確かに私はエンジントラブルが起きていたわ。でもね、こつちにだって脱出用のパラシュートぐらいあるのよ。アンタが突っ込んで来なけりゃペイルアウトしてたつてのに……」

「あの……それはつまり」

「邪魔だつたてこと!」

ガシャン。と機械音がしてプロキオンはふんわりと着陸する。

「それはその……ごめん」

取り敢えず誤つておく。助けてあげたというのに怒られたのでこうして謝るのはいささか不本意ではある。

マニピュレータを地面へと降ろす。柵代わりになっていた指がゆっ

くりと地に着く。

「まあいいわ。今後は邪魔しないでよね」

彼女はそう言って不機嫌そうにプロキオンの掌から降りるとわざわざメインカメラに向かって「べえー！」とやった。

「こりゃ相当嫌われてるな……」

僕の方がやれやれと言いたい気分だった。

「……彼がいなければ死んでたわね」

夜遅く。一人の私は格納庫にいた。私はボロボロになったAD アイマードレス を撫でるように触れ、「ごめんね？」と言った。

「あの時、私のADは完璧にコードを受け付けなかった。ウェアラブルコンピュータ事態にバグが起こってた……つまりあの状態で手でパラシュートを引くなんてこと」

「なんだかむず痒い気分になった。」

私は気をまぎらさず為にADに触れる。抱きしめるように。

「……お父さん」

これが私の存在意義。戦わなくちゃいけないんじゃないじゃなくて戦うしかないのだ。

「瀬田 大輔……か」

彼の名前の口に出す。すると勝手に私の口は動いて「とんだ阿保ね」と言っていた。

本当に阿保だ。

本当に……

朝。C区画とB区画を繋ぐ列車に乗って僕は愛菜と登校する。通勤

ラッシュを避けて学校に向かうと大体始業20分前に到着する。

「ねみい」

あくびをしながら廊下を歩く。昨日、一昨日とあんな事をすればそれはそれは疲れるもので体は悲鳴を上げる。

「寝足りない」「もつと休ませろ」

僕の体の節々はそう語っている。

すると朝から教室の前に妙な人ばかりができていた。その中には涼介もすっかりと混ざっている。彼奴にしては珍しく早い。

「おはよう涼介、今日は随分と早いなあ」

「早いも何も、お前メールみたか？」

「はあ？」

しぶしぶと僕は眠い顔をこすりながら携帯を取り出す。どうやらサイレントマナーになっていた。

メールが一件。涼介からだ。

『長門 流希がウチの高校にいるぞ！』

「あー、長門 流希って……おい待て、何であの女がここにいる。

つか、この人だかりは長門さん目当てなのか？」

「お前……当たり前だろうが！俺達は長門流希親衛隊。長門嬢をMFLから守るのが俺たちの勤め！！」

涼介がそう高らかに言い放つと後ろにいた連中をうんうんと頷く。

「あっそ、きつとアイツはお前等が思ってるような女じゃないぞ？」

「なっ……大輔、お前長門さんと親交が」

涼介は取り敢えず無視する。人だかりを掻き分けようとするとまるでモーゼのように道が出来る。なんだ？と思ったら俺の目の前には

……

「長門……流希……」

「昨日ぶりですね。瀬田君。いや、瀬田特技兵」

雰囲気が全然違っていた。昨日の勇ましい、髪の毛を縛った彼女の姿な無く、長い黒髪を垂らし、メガネを掛けた大人しそうというか優等生のような雰囲気を醸し出している。

「改めて。よろしく願いします、瀬田 大輔特技兵。」

彼女がそう言ったや否や僕は押しつぶされる。そう、例の親衛隊に。「貴様！長門様とどういった関係だ！！」とか「この無視が！長門様の露払いは我々が！！」とか「長門様は俺の嫁！！」とか言いながら。

親衛隊に押しつぶされる僕を見ると長門さんはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、教室へと戻っていく。

その後、担任の西東先生にきっちり絞られたのは言うまでもない。

第三話 約束の放課後

チャイムが鳴った。スピーカーから流れるその音を聞いて教壇に立つ先生は「それじゃあ今日はここまで」と言って教科書をパタリと閉じる。

「起立」

日直の生徒が言った。その号令に合わせ、私は立ち上がる。

礼をして座る。何気ない動作の間にも私の頭は不安で消えなかった。昨日、幼馴染で私の家に居候している大ちゃんは8時過ぎに戻ってきた。黒い制服には砂埃がたっぷりついていて、さらには軍部の車で送ってもらってきた。確かに大ちゃんのお父さんは軍人さんだ。それでも……

「次のニュースです。昨日、午後6時頃、AブロックVMF基地周辺にてMFLが出現しました。なお、今回のMFL出現による死亡者はゼロで、3名程が軽いケガを負った模様です」

誰かのケータイから聞こえたニュース。この報道は昨日既に聞いた。一昨日、大ちゃんはあのロボットに乗り、戦った。そして昨日はお父さんのいるAブロックVMF基地。つまりは事件現場に向かい、ボロボロになって帰ってきた。

もう、考えられることはひとつしかない。

私は物思いにふけりながらカバンからお弁当箱をとりだす。薄い肌色をした楕円形の蓋を開ける。

お弁当はいつも私がつくる。両親は共働きで忙しいので私の分も大ちゃんの分も朝、早く起きて作っている。

ボーッとしながらも箸でお弁当をつつく。すると途端、口に甘さが広がった。

急いで箸を見ると細い木製の箸は簡単に作った野菜炒めを摘んでいた。

お塩とお砂糖間違えた……

余りにも初歩的で致命的なミス。いつもどおりじゃない自分に失望した。

「うへっ、なんじゃこりゃ」

涼介と昼食を食っていると途端に変な物に出くわした。

「ん？どうした大輔」

「いや、なんでもないよ」

適当に誤魔化すとその根源たる物を見定めた。ふりかけご飯の隣にある野菜炒めか。

しかし、野菜炒めがこんなに甘いはずはない。考えられる要因は一つ。塩と砂糖を間違えた。

いやいやいや、まさか愛菜がそんなミスを犯すなんて……

そういえば昨日から愛菜の様子がおかしかったような気がする。ま

あ、あんなボロボロで帰ってきたし無理もないのか。

余計な心配かけちゃってるな。と僕は責任を感じる。

今朝、僕は正式に父さんからV M F Lへの入隊を言い渡された。階級は特技兵とかいつているが僕にはよく分からない。目の前で惣菜パンをガツガツ食ってる軍事オタクに聞けば一発だろうがそれもそれで気が引ける。というか余計な詮索はされたくない。

いや、そもその原因は

僕は窓側を見やった、昨日までは誰もいなかったその席には女の子が座っている。背筋をピンと伸ばしてちよつとずつお弁当を食べる姿からは昨日の様子は想像できない。

ともかくにも僕はもう後戻りは出来なくなった。父さんにも言われた。『お前は自衛軍という機械の中の一部になった』と。

最後の一粒をつまんで口に運び、ペットボトルのお茶を一口飲む。渴ききつた喉が濡れた。

今日は掃除当番はサボった。いや、怪我の關係がなんとかと言って保健室で休んだ。

あたたかな陽の差し込む硬いベッドに寝転がる。薄いタオルケットが太陽でちょうど良い温度に温められ、さらに僕の眠気助長させる。途端、眠気を吹き飛ばすような音が響いた、ガラガラっ！とカーテンを開ける音。それも思いつきり。

人様が気持ちよく眠ろうとしている間になんだと思い、僕はゆっくりと体を起こす。目を擦ってゆっくりと焦点を合わせる。始めはただの人影にしか見えなかった物がだんだんくつきりと見えてくる。

「なんだ涼介か」

「なんだとはなんだよ」

はぁーっとため息をついて僕はベッドの横にかけておいた制服の上着を取り、袖に腕を通す。

「で、一体なんなのさ？」

「あ？お前昨日ゲーセン行くつつってただろ」

そういえばそうだった。確か昨日、父さんに呼び出されて急いで電車に乗ろうとしたときに涼介を適当にあしらって……

「……行くの？」

「行くの！」

仁王立ちで涼介は言った。やれやれと僕は肩をなでおろすとまだ眠い目を擦ってカバンを肩に掛けた。

B区画は教育機関と商業施設で成り立っている。そしてブロックの大半は商業施設で埋めつくされている。新長野市にある高校はたった3校。いや、正確には4校だったか。

それはつまり学校の外に出ればお店が立ち並んでいるという事で僕

ら行きつけのゲーセンも徒歩数分の所にある。

店内は学校帰りの高校生でひしめき合っている。因みに小中学生は親の承諾がないと出入りが出来ない。専用のカードを作らないと警報が鳴ってA区画の教育委員会に通報されるというシステムだ。

「おー、今日は久々にあいてんじゃん！」

涼介が結構大きめのゲームを指さす。

『ADシュミレータ』

ADのようなスーツを来て、バーチャル空間で戦うというゲームである。もともとVMFLが新兵育成用として開発していたがADの正式採用見送りによって御蔵入りとなった。

シュミレータとはいっても流石は軍用、リアリティは他のこの手のゲームとは比にならない。さらにVMFLが制作の赤字を補填する為に一回のプレイ料金が結構割高になっている。

「またこれ？」

「またこれ」

僕の事はスルーして涼介はADシュミレータを装着、お金を投入する。

正直このゲームは飽きるほど涼介とやった。半ば強制的に。御陰でその頃のお小遣いは凄まじい勢いで飛んでいったのを覚えている。

「仕方ないなあ……じゃあ記録更新を狙って」

お金を投入する。協力プレイのランキング、そのトップにはR&mp;Dと書かれている。無論僕らR 涼介 & D 大輔 だ。

『Ready?』

ヘルメットに搭載されたヘッドマウントディスプレイ。3D映像の映し出されるそれにはそう表示される。

それから数秒、『Go!』と文字を変えた途端、僕は足を蹴るように動かす。何とも言えない浮遊感が唐突に僕を襲った。

ADシュミレータはJAXAの協力もあつたとかで張りぼてのAD

には無重力の訓練装置がついており、空を飛ぶ感覚を擬似的に味わうことができる。

しかしながら元々『訓練用』に開発されたものであり、『遊び』には決して適さない。これを好んでプレイしているのは僕の隣の奴ぐらいだろう。

「大輔、2時の方向から敵3。7時の方向に2。俺は前を受け持つ。お前は背中を」

「はいはい」

生返事をする。僕は思い切り足をぶん回してバーニアが点火されたまま回転する。とはいってもその映像はヘッドマウントディスプレイが映し出す3D映像。本当に火が出ているなんて阿呆な事は起きではない。しかし、流石は軍用シュミレータ。バーニア噴出時に足に掛かる負荷は完璧に再現されているらしく、機械自体がわざと渋くなる。無理矢理動かしてやっと方向転換出来るというほどだ。

「レディ」

涼介が言った。僕はガンコントローラを前に突き出すとバーチャルに映し出される照準器を元に狙いを定める。

トリガーを引く。ADを伝って擬似的な衝撃が腕から体へと響いていく。

しかし、そう簡単に着弾しない。他のシューティングゲームと違って当たり判定がかなりシビアなのだ。それがマニアックなファンを有無要因なわけだが……

「クソッ、フォックス2！フォックス2！」

「分かってる！」

敵から飛んでくるミサイルをブレアを使ってかわす。それと同時に、ライフルを撃つ。

「何やってんだ！ファーストステージは残弾残すために3バーストだって言っただろ？」

さっきから隣の軍事オタクがうるさい。所詮はゲームなのだから……
…と思ってしまうが何時の間にか僕らは1stステージをクリアし

ていた。

リザルト画面が表示される。撃墜数、ダメージ、命中室、残弾数。あらゆるデータが表示されるのはやはり元が軍のシュミレータだからだろうか。

「おし、それじゃ記録更新目指して」

「わかってるって」

コントローラのトリガーを引き、リザルト画面をスキップする。

『2nd Stage・Ready?』

恐らくネイティブスピーカーと思われる流暢な英語。それがさらに興奮を助長させる。

『Go!!』

それと同時に、涼介が作戦を叫ぶ。

「散開して敵を挟む。俺が先行する!」

バシユツとブースト音を僕の隣で響かせて加速する。

「了解、ちやつちやとファイナルステージまで行こう!」

僕も足を突き出すようにして、機体を加速させた。擬似的なGが僕を包み込んだ。

あれから結構長いことやってたが結局ハイスコア更新はならなかった。それよりも前に僕の財布がすっからかんになるところだ。

「なあ、涼介。僕はもうこれで終わりにするけど」

僕がそう言つと涼介は「えー!」と一人でブーイングを始める。

そんなブーイングは無視して僕は最後のコインを投入する。

これはもう本を買うの控えようかな。とか、金銭的な事を考えているとボーツとしていた僕の頭に女性の声が響いた。シュミレータのシステム音声だ。

何だと思つてまじまじとディスプレイを見つめると『challenge you!』と表示されている。

誰だ?と思ひながら挑戦者の詳細を開く。

『Lucchini 戦闘回数0 勝利数0 敗北数0』

何だ初心者か。僕はそう思ってた適当に軽くもんでやろうと考えた。隣の涼介が協力プレイがやりたいとか言ってるけどそれでまたラスボスまでやるのはちよつと精神的にも肉体的にも疲れる。それだったら対戦の方がいいかなと思ったのだ。

「あの、よろしく願います」

ゲーム機に設置されたボイスチャットで僕は言った。けれども向こうから応答は無く「ふっ」と鼻で嘲笑ったような声がただただマナーのない奴だなあ。と思っているとゲームが開始する。

「……おい、なんだこいつ」

涼介が言った。戦いの模様はゲーム機の並ぶ場所の目の前にある巨大なディスプレイに映し出される。そこに写っているのは勿論僕の姿だった。

「大輔、気をつける！コイツ只者じゃねえ！！」

涼介がそう叫んだ時には遅かった。既に敵は僕の真上、ステージのギリギリまで上昇している。

「でも、それじゃいいだよ！」

トリガーを引いた。バーチャルに火花が映し出され、CGで描かれた弾道が見えた。

「おい、大輔。そいつは毘だ！」

「毘？一体ど」

僕が言い終わる前に衝撃が襲った。画面にはエラーウィンドウが乱立し、dangerだのwarningだのと表示される。

「終わりよ」

女の声がした。それと時を同じくして近接戦闘用のブレードが僕を切り裂いた。

「ブーツブーツ」と警告音を鳴らしながらADを取り外す。僕はさっきの敵が何者だったのか気になっていた。

あの戦い方、どこかでみたことがある。急上昇、急降下。余りにも

大胆でそれゆえに乗り手の技術を問われる戦闘スタイル。

すると奥の方にあつた筐体がプシュツとエアロックの外れる音がして、その後に警告音と共にA Dが解除された。

まさかとは思つた。アイツなんじゃないかと薄々感づいてはいた。するとそれに気づいた涼介急いで姿勢を正す。

「はうあつ！ なつ、なつ長門様でありましたか！」

長門さんは黒い髪をさあつと左右へ振ると甘い香りをまき散らして僕らの方へ歩いてきた。

「うん、二人とも筋は悪くなかつたわ。もしかしたら将来はA Dに乘れるかもね？」

ニコリ、と笑つて彼女は小首をかしげる。それに感激したのか涼介は涙を流しながら「ありがとうございます！ありがとうございます！」と感謝の言葉を連呼している。

流石にそれに長門さんも引いたのかちよつと身じろぎする。

「あの、それで何か御用でも？」

「ええ、そうよ」

ニコリ、ともう一度微笑む。

僕はこの笑顔に意味を知っている。ゾクリと背筋が凍るような感じがすると彼女が途端に僕の腕を取り、その顔を僕の耳元に近づける。

「……今からV M F Lと一緒に来なさい。」

「えっ、でも時間的に」

「いいから来なさい！」

もう耳を近づけなくても聴こえるような声を出す。ちよつぴり耳がジーンとする。

「じゃあ涼介君、私彼に用事があるから。ちよつと借りるわよ？」

「ハイッ、喜んで！」

敬礼をし、背筋を伸ばす。まるで本物の軍人のように涼介はそう言う。何のお咎めも無しに僕が無理に連れて行かれるのを見ていた。

僕は長門さんに半ば強引に電車へと連れて行かれた。一体何の用事があるのか。そんなものは一切教えずじまいで丁度よく停車していた列車に押入れられた。

日が大分暮れている。結構長いことゲーセンにいたんだなと思った。

「……ねえ」

「はいっ!？」

途端、長門さんから声が掛かった。思わず声がひっくり返ってしまった僕を見て長門さんは苦笑している。

僕が少し眉間にシワを寄せ、嫌な目で長門さんを見つめると「ごめんごめん」といつて必死に腹を抑えて笑いをこらえる。

「でさ、さつきから気になってただけだ。『長門さん』って何よ?。」

「はあ?」

まさかの質問に声が漏れる。

「何って、長門さんは長門さんでしょ?。」

「……あのね、私には流希って名前があるんだけど?。」

「えっと……それじゃあ流希さん?。」

「少尉を付けなさい!上官侮辱罪で軍法会議に掛けるわよ?。」

ガタン。電車が大きく揺れた。僕は「申し訳ありません流希少尉。」と改まって誤ると流希は満足した表情で目線を外へ移した。

エアブレーキが起動し、キィと音を立てながら電車が停車した。

「Bブロック、国立自衛軍特別教育学院前です。」

アナウンスがそう告げた。国立自衛軍驚異学院。通称『攻専』

日本中のエリートというエリートが集められ、自衛軍の特殊攻撃部隊への人員を生み出すという教育施設。この新長野市に存在する学校、いや。日本一のエリート校であり正直な所この駅の前を通るのは気が引ける。

軍服を元に作られた攻専の制服を着た生徒たちが列車に入ってくる。その姿から発せられるプレッシャーのようなものが何だか彼らが僕とは住む世界が違うような雰囲気醸し出す。

「私ね、第三に来る前は攻専にいたの」

流希が言った。

「へえ、それ程優秀だったのに何で第三なんか」

第三という中堅校だ。攻専のレベルに関しては置いておくとして市内トップは第一高校で第三はその次、そして第二と続いている。

「私ね、サボリぐせがあったのよ。なんか学校に行くことに意義を見いだせないっていうか。私の居場所はここなんかじゃない。私は戦いの中にいるんだって」

「……そんな悲しい事言うなよ」

僕がそう言うのと流希は深くため息を着く。

「私のお父さんはね、東京探査班のメンバーだった。お母さんは反対したのにお父さんは私たちを裏切り、その挙句行方不明。そして、気になっちゃたんだよ。最愛の妻と子供を捨ててまでお父さんは何がしたかったんだろうって。だから攻専まで行ったの。そして、その先にあったのは巨大な化け物。笑うしかなかったわよ。でもお父さんに近づけた気がしてさ……」

僕には流希の目が潤んでいるように見えた。手を、声をかけて上げたかったけど僕にはそれができなかった。そんな資格は無かった。

彼女の心にズケズケと踏み入れるなんて真似は僕には出来ない。

「ごめんね、こんな話してさ。とんだ阿呆ね」

そう言うのと流希はあくびをして目を擦る。

「さあ、もう錫木顧問がホームにいるらしいわ。早く行きましょう？」

「うん」

僕がそういった直後、アナウンスはV M F L基地への到着を告げた。

昨日、僕がプロキオンに乗ると決めた日。その人同様、鎚木さんは駅で僕らを待っていた。

それからして徒歩数分の基地に行き、エレベーターで何回かあがった後、小さな会議室に案内された。本来は小隊のブリーフィングルームらしく、V M F Lにはこの手の部屋が5、6個あるらしい。

中に入るや否や僕は鎚木さんからプリントを渡される。部屋の中にはもう何人か人がいた。恐らくA D隊の人たちだろう。

「さて、今回君たちを呼んだのは無論、緊急事態だからだ。」

パチンとスイッチを押し、鎚木さんは電気を消す。リモコンのような物を使うと目の前にあつたプロジェクターから青白い光が放たれ、白いスクリーンに映し出された。

「この写真は5時間前、ロシア西部の森林地帯を写したものだ。見ればわかるように森の中にポツカリと穴があいている。今から6時間前、日本時間の正午過ぎにその森林地帯で爆発が起きた。範囲は半径10 km、幸いにも死傷者は無し。まあ、ロシアが核実験でもしたんじゃないかと思うが先程現地軍の偵察機から面白い情報が出てきた。プリントをめくってくれ」

左上をホチキスでとめられたそれを僕は捲った。そこには難しい数値だの記号だの書かれていて僕にはわからなかった。

「いいか、この一番上のA E値。これは微弱な放射性物質だ。この物質は今まで東京とM F Lでしか確認されていない。しかしながら今回、ロシアではそれが観測された。つまりこれは東京で起きた『何か』が再び起きようとしている」

寒気がした。僕は資料でしか読んだことはないけれど実際に東京の『何か』を体験した父さん曰く「地獄絵図」と言っていた。核兵器だとかそういう物に並ぶ。いや、それ以上の禁忌だと。

「そこでだ、明後日の明朝、我々はロシアへと調査に向かう事に決定した。しかし現地ではM F Lの発生も示唆されている。そこで今回はA D、並びにプロキオンにも同行してもらう。万が一のために。私はプロキオンに同乗し、爆発の調査を行う。異論のある者は

いるか？」

鎚木さんが辺りを見回した。僕はそーつとを上げる。

「どうした、大輔君？」

「あのお、学校とか家族とかの了解は……」

「無論、学校側には言いつけてある。それに君の父上はここに司令官だろう？何の心配はない。それとも怖気づいたか？」

「いや、そういうわけじゃ……」

すると鎚木さんは前を向く。

「それでは作戦開始は明後日、明朝 三 時だ。時間には遅れるなよ。以上、解散」

あれから僕は雀野家へと戻った。玄関に現れるや否や愛菜がげっそりとした顔で僕を心配してくるので僕の方が心配になってしまった。それにしてもこの家の人たちに僕は作戦について話さなければならぬ。きっと怒られるんだろう。もともと愛菜のお父さんは厳格な人だ。

僕が実際に会うのは食事の時ぐらいでそれ以外はいつも仕事に励んでいる、何とかストイックというか。僕の父さんといい皆不器用なんだなと思ってしまう。

「はい、いっぱい食べなさいよ」

木製のテーブルに愛菜のお母さんが食事を置く。今日はカレーか。

「いただきます」

食事が出揃い、家族の声が合わさった。

スプーンのカツカツという音が響く。そこに時計の針の音まで響いてくる。

「あの……」

僕が思い切って声を出すと家族全員が一斉に僕の方を向いた。

「お話があるんです。聞いて貰えますか？」

「これでよかったですか司令？」

鎗木はニヤけながら白衣のポケットに手をつ込み、壁へと寄りかかる。

「いいんだ、私たちの目的。いや、使命がそれだ」

休憩室。喫煙所と化しているそこで私はタバコを蒸かしながら言った。

「それもそうですけど息子さんのことですよ」

「まずは第二の東京 セカンドシティ の出現を止めるのが先決だ。それに、大輔なら自分で答えを見つけられるさ」

「それは生き残りとしての勘。ですか？」

「さてな」

私は東京都民の生き残りの一人だ。あの地獄を見てきた者の一人。今では東京出身というやつは煙たがられる傾向にある。放射能だとかウイルスだとかと一緒に。所謂風評被害という奴で『何か』をくぐり抜けた人間は差別された。今では『東京』というワード自体が差別用語の様に扱われている。

「分からないが、親子だとかそういうのとは違う確定的な信頼があるんだ。説明は出来ないけどな」

吸っていたタバコを灰皿へと捨てる。火が消えたのを確認すると私は休憩室から出る。自動ドアが開く。

「息子を預かってくれ」

「了解しました」

鎗木がそう言ったのを聞き、私は司令執務室へと歩きだした。

「どうして黙っていたの？愛菜も知ってたのならお母さんに教えなさいよ」

愛菜のお母さんは僕の話聞いた途端、声を荒らげた。成り行きとはいえ子供にこんなことをさせるなんて馬鹿げている、と。

「そんなの死に行くようなものよ。大輔君、悪いことは言わないわ。今すぐお父さんに連絡をとって」

「母さん」

先程まで沈黙を保っていた愛菜のお父さんが割り込む。

「いい、そんなこと大輔君がする義理は無いの。今すぐやめなさい」
「母さん！」

愛菜のお父さんが声を荒らげた。その細い目は威厳と風格に溢れていてじつと僕を見つめる。

「愛菜、母さん。悪いが二人で話させてくれ」

「でもお父さん」

「聞こえなかったか？二人で話させてくれ」

愛菜のお父さんがそう言うとお母さんは少し渋って出るのをためらうが愛菜に連れられてリビングを出る。

「ごめんな大輔君。妻は女だからね、こういう男の世界の話つてのは男にしか分からないもんだろう？」

僕はコクリと頷いた、愛菜のお父さんはそれを確認すると缶ビールのプルタブを開ける。

ブシュツと音がして泡の立つ音を響かせるそれを飲むと愛菜の父さんは話を続けた。

「俺は君のお父さんと高校時代同級生でね、彼奴は凄いい奴だったさ。彼奴は前々から軍に入りたがってた。成績優秀なのに敢えてな。それで俺は彼奴に聞いたのさ、何で軍に行くんだって。お前ならもつといい大学行けるだろってな。そしてらなんて帰ってきたと思う？」

「……男なら誰かの為に何かをしてみろ」

僕がそう言うとお父さんは驚いたような顔をした。

「流石は親子ってところか。彼奴はそう言って今は俺の手の届かないところまで行っちゃった。その時の彼奴の目に今の君がそっくりでさ。」

彼ははにかむとビールを飲む。コトン、と机の上にビールを置くとさらに話を続ける。

「では、最後にこれだけ聴きたい。『それは君がやりたいこと』なのか？」

「……分かりません。でも、少なくとも僕は僕の出来る事をやりたい。やれるのに黙って見過ごすなんてマネは出来ない。それだけです」

「そうか……わかった、母さんと愛菜には私が説明する。でもこれだけは守ってくれ」

そう言うとき愛菜のお父さんは大きな手を僕の前に差し出す。

「生きてまたカレーを食いに来いよ」

「はい！」

僕はそう言って手を握った。大きく、硬いその手はとても暖かかった。

どうやらあれから僕を抜いての家族会議が始まった。僕は寝室兼勉強部屋である元倉庫の自室ひ入るとベッドに寝転んだ。

明日にはここにはいない。再び何かと戦うことになる。上手くできるのだろうか？ いや、なんとかするしかない。

愛菜のお父さんだて僕を信じてくれたんだ。それを裏切る真似なんて出来る訳がない。

「さてとつと！」

体を跳ね上げて立ち上がる。机に掛けたカバンを取るとファスナーを開けた。中には教科書類とプリント類。我ながら無機質なカバンだ。

僕はその中から数学の参考書とノート、問題集を取り出すとそれを机においた。明後日には学校どころか日本にすらないのだ。今のうちに出来ることはやっておかなくちやならない。

僕が鉛筆立てからシャーペンを一本取り出そうとすると「コンコン」とドアをノックする音が聞こえた。控えめな音から察するに恐らく

愛菜だろう。

「どうぞ」

僕がそう言つとギィツと音を立ててドアが開いた。

「あの……勉強中だった？ごめん」

「いや、いいよ。まだ始めてないし」

僕はそう言つて問題集を閉じると椅子から立つ。

「それで、何か用事？」

「うん……その……」

愛菜は何か言いたげな表情をするも「あの……」とか「その……」
と言っただけで一向に何も話さない。

そろそろ僕もうんざりしてきたときに愛菜が言った。

「その　生きて帰つて来てね、大ちゃんが死ぬなんて嫌だから」
「うん」

そう僕が答えると愛菜はゆっくりと深呼吸する。息を整え、微妙に
赤みがかつたその方を必死に抑えながら。

「よしっ！」

愛菜がそう言うや否や僕の視界が奪われた。それと同時に、何かが唇
にあたつた。

初めは理解できなかった。一体愛菜が何をしたのかを。ややあつて
僕は状況を把握する。唇を奪われたのだと。

柔らかい感触が唇に触れる。弾力があつて暖かい。僕はもっとその
温もりを感じていたかつたけど愛菜は唇離した。

しばしの間の接吻。顔を真つ赤に染めた愛菜は僕の顔を見ないまま

「これは約束のキスなんだから……」といった。

「帰つて来るつて約束なんだから……」

そう言つと彼女は真つ赤に染め上げた頬をさらに赤くして部屋を一
目散に出ていく。

僕は自分の手を唇に当ててみる。僅かな感触が唇に残っていた。

第四話 深紅の欠片

朝、ケータイのアラームで目が覚めた。即ちそれは作戦決行が翌日に迫ったということ。

布団に潜っていたという日常と明日にはこの街はおるかこの国にいないという現実の狭間。僕は現実に淘汰され、澁々と羽毛布団を畳む。

一回の台所からは愛菜と彼女のお母さんが朝食を作っている。階段を降りる際に漂うその香り。鼻腔をくすぐるそれで明日という現実を騙す。

朝陽が窓から照りつける。目を擦りながら僕はリビングへと足早に降りた。

「おはようっす」

ポン、と僕の肩を誰かが叩いた。恐らく涼介だろうと僕は思っ振り返るとやっぱり涼介だった。

そもそも僕に声を掛けるのは涼介や愛菜、流希ぐらいで他の人は事務的な事や僕から話しかけなければ話すことはない。

その理由は明白で僕が東京出身だからだ。『何か』が起きた直後に生まれた僕は軍部の生き残りであった父さんと共に長野に來た。母さんは僕を生む際に死んだという。

東京差別。今でも続いている事だ。東京で起きた『何か』をウィルスのようなものとして捉え、東京出身者を病原菌のように扱う。

今では『東京』というワードを言っではならないという暗黙の了解があるため。そして僕の父さんがV M F Lの司令官ということもあってか表立って差別されることはない。

あるとしたらこれ以上の深い関係を作らせてくれない。という壁を作られている事だ。

僕は窓の方を見た。隣の流希が教科書をまとめながら「明日は遅れないですよ」と小さく呟いた。

「わかってるよ」

僕はそう答えるとカバンから教科書を取り出す。

何とも言えない圧迫感のような物を感じる。嫌な気分はない。でもいい気分はしない。

周りのクラスメートは東京で起きた何かが再び起ころうとしていると分かっているのだろうか。

ギョツと締め付けられるような苦しみを感じた。

ついに放課後となった。傾きかける日が廊下を照らしている。

「なあ、大輔？」

「うん？」

僕がカバンに教科書をつっ込んでいると涼介が振り向く。薄っぺらいカバンを振り回して僕の机の上に置いた。

「お前知ってるか？自営軍の新型兵器。昨日、A区画での戦闘で使われたって話だけ残念なことにADシュミレータに夢中でさ、警戒区域に侵入するタイミングを間違えちゃってさ」

てへへと笑いながら涼介言う。さらっとこんなことを言っているが一応「新長野市条例違反」である。

「まあ……知ってるというか知らないというか」

「おい、知ってるのか！？あれだけは幾ら長門様に聞いても答えてくれないんだよ」

いや、答えられないのは仕方ないだろう。彼女だって軍人だ。そう簡単に機密は

不意に目を時計にやった。

まずい、A区画行きの電車が来る。

「なあ、涼介。今日はこれくらいにして帰ろうよ。な？」

僕がそう言つと涼介は「ええー！」とブーイングをしながらも教室

から出る僕を追いかける。

「今日は随分といそいでるんだな？」

「まあね」

適当に返す。ここで軍事機密をバラしたら流希になんと言われることか。

下駄箱に出る。靴をはきかえると校門前の駅に走った。

入口のエスカレーターは右側を通り、駆け上がる。隣でぺちゃくちゃ喋ってる生徒なんて気にせず。

僕にはそれよりもやらなければならない事がある。ここの人たちを守らなくちゃいけないんだ。

電子定期券をタッチしてA区画行きのホームに向かう。

「おいおい、C区画行きはこっちだぜ？」

後ろから涼介が言った。

「いいんだ、今日は父さんに用があるんだ。A区画方面に行く」

「ほう、奇遇だな」

「は？」

「俺、今日はちょっとD区画に行かねばならなくなてな。そういうこと」

「はあ……」

D区画。というと国際空港が面積の3分の1を占める新長野市最小のブロック。なんでそんな所に涼介が。旅行に行くにしても明日は学校だ。僕は公欠扱いだけど涼介は違う筈だが……

そう言っている間に列車が到着した。僕らはアナウンスの後、その中へと足を踏み入れた。

ややあつて、列車はA区画V M F L前に到着した。これから二駅先にいった所がDブロック新長野国際空港駅となっている。

ホームへと降りたものの今日は鍋木さんの姿は無かった。きっと明日の作戦で皆忙しいのだろう。そう考えると僕もこんなところでト

ボトボ歩いているのが失礼に思えて足が自然と早くなった。

基地へと入った頃には既に日が沈んでいた。中の兵隊さんたちは皆僕を見ている。やはり目立つのだろう。自衛軍の新型兵器を土壇場で動かし、二度も戦闘に介入した司令官の息子。

一部からは「七光り」だとか言われそうだけどそういった陰口には昔から慣れていた。東京差別の規制前と比べたらよっぽどマシだ。

「瀬田軍曹！」

「ハイッ！」

唐突に呼ばれて思わず声が裏返った。すると僕を呼んだ張本人が後ろでくすくす笑っている。

「……流希、笑わないでよ」

「少尉を付けなさい。さて、どうせ案内が居なくて心細かったんでしょ？ ほら、付いてきなさい。アンタの部屋はこっち」

そう言うとき流希は僕の手を握り、歩き出す。柔らかいその小さな手が僕を引っ張る。

こんな小さな女の子が戦っていると考えると

いや、彼女はお父さんに近づきたかったんだっただけ。僕は思い出すと余計を考えるのをやめにする。

視線を感じる。賑やかというより騒がしいというような基地の中、僕と流希は歩いていった。

「ここがアンタの部屋よ。一応たった一人のDE-S起動者ってだけあって結構な待遇なんだから」

「ありがとう」

「礼なら司令と嫡木顧問に言っで。私は別に何もしてない」
そう言うとき流希はそっぽを向いて足を動かし始める。

「あっちよっ！」

僕が呼びかける。それと同時に、彼女は足を止める。

「明日、頑張りなさいよ」

再び足を動かし始める。さっきよりも足早に彼女は歩いていく。僕は声をかけようにも出来なかった。

今日、大ちゃんが帰って来ないのは分かっていた。それでも私はいくばくかの期待があったのだろう。何時の間にか私は四人分の夕食を作っていた。

あれからまだ一週間も経っていない。それなのにこんなにも遠くに行ってしまった。

一緒に学校に行つて、一緒に学校から帰つて、道草して、一緒にご飯食べて

「私にも出来ることないのかな」

ふと思った。でも私にそんな事は出来ない。

私に出来ること。

私はこうしてお料理したり洗濯したり。それしかできない。

でも大ちゃんは何時の間にかこの街の 国の人を守る立場になっていた。大ちゃんのお父さんは軍人さんだし前々からそうなることは分かっていた。

でも、あまりに唐突だった。

現実を受け止めきれてないのだ。

つくりすぎた料理を見てお父さんが「どうかしたか？」と聞いた。

私は潤んだ瞳から涙が溢れるのをこらえ、笑みを浮かべると「なんでもないよ」と返した。

ケータイが小刻みに震えた。三疊程のベッドしかない部屋で僕は寝転がっていた。

電気のついた部屋の中、僕はケータイを手に取る。メールが一件届いていた。愛菜からだ。

『こんばんわ。もうご飯は食べましたか？明日はついに作戦が始まりますね。絶対に生きて帰って下さいね。私は大ちゃんを待っています。』

愛菜らしいな。僕はそう思うと携帯を閉じる。

ベッドから体を起こす。いい加減適当にシャワーでも浴びないと気持ちが悪かった。

あれからシャワー室を探すのに一苦労し、さらに汗をかいた僕はそれを洗い流した。

使っているのは筋肉質なおじさん。もとい、お兄さんばかりで最初は気まずかったものの皆いい人ばかりで直ぐに打ち解けてしまった。支給品のタオルで水滴を拭くと用意されたスウェットのような寝巻きに着替える。

今度は案内もあつてか簡単に部屋に帰ることができ、僕は一日精神的に疲れた体をベッドに委ねた。

アラームを一時にセットする。作戦開始は三時。いつもはテレビでも見ているような時間だが今の僕には時間が惜しかった。

深夜。作戦開始まであと数分となったV M F L。その中枢に位置する巨大な司令室、つまりはV M F Lの『脳』となる部分に私、瀬田浩三は居た。

まだ夜も開けておらず、窓からの光は一切差し込んでいない。人工の光のみが部屋を照らしている。

司令席から私は見下ろすようにオペレーター達が忙しく動くのを見た。高速で動くその手がキーボードを叩き、軍部はそれによって連携をとり、動く。

視線を自分の手前に戻した。机の上には大量の書類が残っている。深夜からこんな事をやっている自分をアホらしく思いながら渋々とペンと印鑑を握る。

こんな物、会計にやらせておけばいいものを。そう思ってしまうのも仕方ない。V M F L自体急場凌ぎの独立愚連隊のような物で実際にV M F Lの母胎となっているのは自衛軍でなく、東京探査班で有名な相模原遺伝子研究所だ。だからこそA Dやプロキオンのようなものが扱える訳だが。

ふと、一枚の書類が目に入った。「シリウス 整備費削減に関するレポート」書類にはそう書かれている。

東京探査班の遺産の一つ、『シリウス』これはプロキオンよりも後に作られたものだと思われ、当初はシリウスの起動実験を優先して行われていたが機体の動力部に未知のテクノロジが使われており、それを統括するシステムが何らかの生涯を起こしたことで実験は中止となった。

そんなこともあって未だに整備の続けられているシリウスだが動かない兵器を大事に取っておくことに対し不満を抱くのは無理もないしかし、それも今回の調査が成功すれば変わるだろう。相模原教授が見たもの。それさえ分かればシリウスは

「ロシア探査部隊、離陸を開始」

オペレーターの一人がそう言ったのをきっかけに私は目をモニターへ戻した。巨大な薄型モニターには大きな輸送機が滑走路を飛び立

つ姿が映っている。

「……答えは見つかったか」

私がそう言つと一番近くにいたオペレーターの女性が首をかしげる。私は「なんでもない」というとシリウスの整備費削減のレポートをゴミ箱へと投げ捨てた。

巨大な輸送艦に乗って僕らはロシアへと飛び立った。

小さな窓から僕は空を眺める。雲を突き抜けてゆく輸送艦からはほのかに陽の光が見える。

「アンタ、何やってんのよ？」

不意に流希が僕の後ろから声を掛けた。びっくりと肩を震わせて振り返る。

「ほら、デッキはこつちよ。自分の機体を把握しておくのはパイロットの仕事。さっさと行きなさい！」

流希はそう言つとその小さな体で僕の体を押す。

「ったく、男ならはやくしなさいよ！」

すると途端にグイグイと僕を押していた手を離れたかと思うとその手で僕の手を握った。

「ほら、同級生でもここでは私が先輩、上官。言つこと聞きなさい」
そう言つて流希は僕の手を力強く引つ張つて行つた。

それから少ししてAD、そしてプロキオンの格納庫へとついた。灰色に包まれた格納庫はたくさんの電球にまみれ、壁がそれを反射する。

「はい、プロキオンはあっち。キャットウォーク伝つてそのまま真っ直ぐ」

流希は顎を使つて前方を指す。その先にはADとは違う巨大な白亜

の機体があつた。

プロキオン。僕はアレに乗って二回も戦った。その周りには鍋木さんを始めとする整備班の人たちが忙しく動いている。

「……アンタはさ、何で戦う事にしたのよ」

僕がプロキオンの方へ歩き出そうとした途端、流希がそう言った。僕が足を止めようとすると言った流希は「歩きながらでいい」と言った。「どうしてって……やらない気がしたからかな？」

「ハア？」

流希は顔にシワを寄せて言う。

「いや、そんな事聞かれてもさ。僕だって何時の間にかこうなつてたんだし……」

「ADの操作とプロキオンの操作は似てるって聞いたけどシュミレーターを極めた如きじゃそう簡単に」

流希は何かを言おうとしたが口を抑えた。それから少しして渋った顔をするともう一度口を開く。

「アンタの前任者 小宮山中尉。いや、今は二階級特進で少佐だったわね。あの人は私たちの中のエースだったの。それも私なんか比にならないほどのね？そしたらある日、ADと同じ相模原の遺産のテストをやるとかでAD隊を除隊してテストパイロットになったの。」

そう言うと言った流希は僕の方を見る。

「アンタはあの人の命も背負ってるの、半端な真似したら後ろから撃つから」

流希は右手を銃の形にすると僕の方に向け「バンッ」とやった。

途端、機内の無線にロシア語の声が聞こえた。鍋木は急いで操縦席へと向かう。

「どうした、何があつた？」

鍋木がそう問うとパイロットの男二人は急いで振り返り「ロシア空

軍が警告を発してきました！」という。

「なぜだ、ロシア政府にすっかり許可は取っておいたはずだ。もう一回連絡を取ってみろ」

パイロットの男はインカムを握るしめるようにすると流暢なロシア語で敵航空機に向かって問いただす。「こちらは日本のVMFL、探査部隊だ。許可は取っておいたはずだ」と。

男の額をいやな汗が伝った。

「……どうだ」

鎗木が問う。副機長の男もじつとロシア語を話す男を見つめる。

「……駄目です！撃ってきますす！」

彼がそう言った途端、操縦室をはじめ、機内に取り付けられたミサイルアラートがけたたましく鳴った。

「クソッ、早く回避運動をとれ。探査ポイントまではあと少しなんだぞ！」

「了解です鎗木顧問」

そういつて男はライダーコントロールスイッチを操作する。大きく機体が揺れる。鎗木は何とか座席の背もたれに捕まってやり過ごす。

今頃格納ブロックの連中はてんでこ舞いだらう。

「……第二波きます。フォックス2！フォックス2！」

機長がそう言っていると鎗木は口元を押さえ、考え込む。そうして機体が大きく旋回する前に言った。

「……仕方ないか、時間稼ぎを頼んだ」

「頼んだって、鎗木顧問はどこへ？」

「プロキオンとAD隊をここで降下させる。撃墜されるよりはマシだ」

鎗木はそう言っていると壁に設けられたドアのコントロールパネルを使い、操縦室へのドアを開く。そして格納庫の方面へと歩き出した。

鎚木さんが格納庫に戻るや否や大声で「予定を早めるぞ！各員戦闘配置！」と叫んだ。AD隊の人たちは急いで体に装甲を取り付け始める。グレーの鎧のようなものを足から順にロボットアームが取り付けていく。プロキオンの隣であつた流希は真っ赤な鎧をつけていた。

「大輔くん、予定通り僕等はプロキオンで目標地点まで接近して調査する。いいね？」

コックピットに仮設シートを取り付けながら鎚木さんは言う。

「あの……さっき大きくゆれましたけど何かあつたんですか？」

僕がそう問うと鎚木さんは物思いにふけたような顔をした後、「なんでもない、気にするな」といった。

「そう……ですか」

レバーをつかむ。支給された軍服に専用のインカムを付けただけ。そんな簡素な装備のまま僕はメインコンソールをタッチしてプロキオンを起動させる。

低い重低音を轟かせながらエンジンは動き始める。コックピットを小さく小刻みに振動させながら。

「鎚木顧問、もう限界です！早く脱出を！」

途端、球体型モニターに通信ウィンドウが自動で開き、音声だけを伝えた。発信場所はこの輸送艦の操縦室。

「わかつた、今すぐ降下させる。大輔くん、今から前でのハッチが開く。そこから降りるんだ」

「分かりました」

僕はそう言うのとフットペダルをゆっくりと踏んだ。プロキオンは少しづつカタパルトへと近づく。

「いいか大輔くん。今のプロキオンは飛行用のExternal Flight system、つまりは無理やり飛べるように改造してある。操作はADと一緒にできるか？」

「やってみせます」

ペダルから足を離す。ガチャンと金属音がしてカタパルトへの接続

が完了した。グレーの装甲板がゆつくりと開き、まだ朝日が出たばかりのロシアの空が姿を表した。

僕のみている方向からはちょうどよく太陽がまっすぐに見えた。つまりはほぼ真東を向いているわけだ。

装甲板が完全に開ききった。風がなだれ込む。発進用のランプが赤い灯りを点けた。次に隣のランプそしてもう一つ隣の3つ目のランプに明かりが灯る。その次に全てが青く染まってプロキオンのモニターには『B e c o m e a b i r d . 』と表示された。

「プロキオン、行きます！」

ペダルを強く押し込んだ。後方のスラスタが青い光を放ち、カタパルトによって押し出された機体は虚空へと飛びたって行く。

光は膜となり、機体の後ろへと広がる。その姿は彗星のようだった。

「こちらクリムゾン1、プロキオン聞こえる？」

モニターの左側、赤いウィンドウが開く。クリムゾン1というのは流希のコールサインだ。

「こちらプロキオン、どうかした？」

「どうかしたのなにもないわよ。先刻の緊急降下でAD隊が分断された。私は隊員の生存確認とロシア軍を何とかする。アンタは早く目標ポイントまで行きなさい。鎚木顧問を頼んだわよ」

流希がそう言うウィンドウが勝手に閉じて通信終了の文字が表示される。リーダーを確認するとプロキオンとは逆方向に飛翔する機体があった。AD隊、クリムゾン1のIFF 敵味方識別装置、流希だ。

「あの、鎚木さん、さっきロシアがなんとかって……」

「いいから君は操縦に集中しろ。心配するな、僕には作戦立案の責任者として君たちを生きてVMFLに送り届ける義務がある。今は君のやるべき事に集中するんだ」

わかりました。と僕は小声で言う。と画面の奥、探査ポイントである

爆心地を見る。土を抉られたような穴が見えた。ここからポイントまではおよそ5、6kmその距離にも関わらず結構な大きさに見える。けれどそれでも東京で起きた『何か』には到底及ばないらしい。そう考えると寒気がした。

真っ赤なAD アーマードレス を着た私は仲間を探してロシアの空を飛んでいた。太陽は雲に隠れ、寒さが世界を支配する。

どこにもいない。反応がない。音の鳴らないレーダー。その全てが私を恐怖へ陥らせる。

「クソッ、どうなってんのよ」

吐き捨てるように言う。ライフルを持った右手の感覚が寒さと重さでだんだんなくなっていく。

この極寒の地で、金属を体中に取り付けて。

フェイスマスクに搭載されたヘッドマウントディスプレイは仄かに白い針葉樹林を映すだけだ。

途端、耳元にセットされた骨伝導タイプのヘッドホンが『Warning! Warning!』とシステム音を鳴らす。

レーダーを見る。どこから湧いて出たのか熱源が高速で接近している。私は急いで脚部のスラスターを吹かして上空へと舞い上がる。

眼下は先程の急上昇でできた煙ともやで視界を遮っている。その中を何かの影がうごめいているのがうつすら見えた。

ライフルを構えた。左手はグリップではなく念のためにアンダーバレルグレネードを持つ。

AR方式のマルチサイトを見る。音声コントロールで私は「サーモスコープ」と言うディスプレイにはAR技術による擬似的なサーモスコープがライフルのマウントに表示される。

赤い動体が見えた。その姿はなんというべきか。ロシアの戦闘機などではない。まるで花のような形だった。

探査ポイントは目に見えていた。あと数秒でそこに離陸できる。そうして探査が終了すれば僕の仕事は殆ど終わったことになる。

大きなクレーターのようなのが見えた。ドーム型にきれいにぽっかり開いた穴は土だけを残し、円の中に木は一切なかった。にも関わらず円の外に出るやいなや樹木が荒らされた形跡はない。

まるでピラミッドだとか地上絵だとかそういうものを見ている気分だった。

「よし、それでは僕は調査を始める。大輔くんは……そうだな、まずはあの円の中心に離陸してくれ」

「わかりました」

ペダルから足をゆっくりと離す。ラダーコントロールスイッチを押し、徐々に機体を下へ向ける。

しかし、僕はそこで何かに気づいた。慌てたバーニアを噴射して急上昇する。

「……ッ！何をしてる！？言われた通りにするんだ！」

「鎚木さん、待ってください！あの球の中に何かあります！……嫌な予感がするんです」

僕がそう言つと鎚木さんはシートから身を乗り出し、旋回するプロキオンから下を見る。

「あれは……」

鎚木さんがぼやく。

見えたもの。それは花だ。真つ赤な大きな花。

「薔薇……なんであんなものが……」

妖艶に輝くそれは僕ら吸い込むように円の中心に佇んでいた。

第五話 光り輝く者 シリウス

四時限目、数学の授業の最中に警報が鳴り響いた。

お昼を食べた直後、暖かな陽の光が誘う眠りに耐えながら受けていた授業はとたんに終わりを告げた。

学校のスピーカーから警報が鳴り響き、その直後、みんなの携帯が一斉にブザーを響かせた。無論、私の携帯もポケットの内でブルブルと震えている。

「新長野市より市民の方々へ緊急避難要請です。市民の皆様は落着いて避難を行なってください。」

廊下にあつた電光掲示板は瞬く間に赤や黄色といった威圧的な色へ代わり、明朝体で書かれた避難誘導灯へ変わる。

教室にいた生徒を始め、先生たちが途端に逃げ出し始めた。私はそれを呆然と見ていた。

「愛菜！なにやってんのよ！」

誰かが呼んだ。でもそれを聞いても私は何も思わなかった。それよりも大ちゃんがない状況、あのロボットがないという状況を考えていた。確か大ちゃんの話ではADも出払つてるとか言っていた。だとすれば今の新長野市は危険なんじゃないか？と。

何故か私はいつにもまして冷静だった。

「雀野！」

また誰かが呼んだ。それは廊下の方向からではなかった。真逆の校庭の方からだった。

私は急いで窓を開けて外を見た。自転車が一つつ、砂埃の中に佇んでいる。

「雀野！早く来い！」

西君だ。でも確か今日は風邪でお休みだったはずじゃ……

すると私がそう考えている間に西君のクラスの伊藤先生がすごい形相で彼を追っかけている。

何か胸騒ぎがする。この街で何かが起きようとしているんだと。

私はその直感し従い、窓際にあつた非常用縄はしごを降ろすとそれを伝つて一気に下へと降りる。するとそれに合わせるかのように西君は自転車を使って西東先生をかわし、はしごの下につける。

「早く！」

西君が叫んだ。食いしばった歯をさらに強く食いしばってはしごから飛び降りる。転びそうになりながらも私は手を引かれて自転車の後ろに乗せられる。

「雀野、事情は後だ。……大輔の為に何かしたいんだろう？」

「……うん」

私はそう言つて頷くと西君は自転車のペダルを勢い良く漕いだ。砂埃を立ち上らせ、自転車は避難者のかき分けながら疾走した。

「西君！なんでまたこんなこと！」

疾走する自転車に乗り、強い風を受けながら私は言った。

「言われたんだよ！長門様に！」

怒鳴るように西君は言う。

「長門様つて、ADのパイロットつて噂の……」

「そう！俺は今朝、極秘作戦に飛び立つ新兵器をこいつに収めるために軍に潜入した」

西君は片手に持ったカメラを持ち上げて私に見せながらそういった。

「その時に長門様に見つかつてさ、もしここで何かが起きたら俺がなんとかしろつて言われたんだ」

「それがなんで私を呼ぶことに……」

「俺聞いたんだ、大輔があの新兵器のパイロットだつてこと。長門さんに。それで、もし私たちのいない間に何かあつたら彼の大切なものを守つてあげてつて」

「それで……私を？」

私が恐る恐るそう聞くと西君は首を大きく立てに振った。

「俺、アホだからさ。アイツの大切な物なんて全然わかんなくてさ。そしたらアイツの大事な物って友だちなんじゃないか。俺達なんじやないかって」

「大ちゃんの大切な物……………って、じゃあどこに向かつてるのよ！？」

「えっ？どこって言われてもな……………」

それからして西君は笑みを浮かべ、後ろを振り向くと当然のようにこういった。

「V M F L 基地だ」と。

深紅の薔薇はクレーターの中心に一輪咲いていた。しかしそのサイズは普通の花を逸脱したものであり、世界最大のラフレシアでさえ凌駕していた。もはやそれは花の形をした全く別の物だ。

隣でパソコンのキーボードを叩く鍋木さんの目はいつになく真剣であり、焦ったような表情だった。彼のパソコンからは様々なエラー音が鳴り響き、それがプロキオンの警告音と共鳴している。

「なんだこいつは……………M F L の 1 0 0 倍近い A E 値を示している……………大輔くん、アイツがどうやら元凶のようだ」

「あれが……………東京を壊滅させた……………」

破壊された緑の中に咲く一輪の花。それが破壊の元凶。妖艶にして暗く、陰湿。

僕がその花を凝視すると僕の網膜に反応したロックオンカーソルがズームを始める。

雲が晴れ、光が少しだけだが差し込み始めた。深紅の薔薇その光を反射し、僕の眼へと向かわせる。

思わず僕は眼を瞑った。その途端、爆発音が聞こえた。その音で叩き起こされるように僕は光の焼きついた眼をこすりながら開ける。目の前に広がっていたのは太陽に花を向ける向日葵の如くプロキオ

ンに花を向けた薔薇だった。その薔薇の中心からは仄かに赤い粒子が舞っている。

「あの薔薇……一体」

鎬木がそう言うのと再び爆発音が響いた。薔薇とプロキオンの真ん中で炎が上がる。上空をロシア軍の戦闘機が飛んでいた。

「まさか長門くんが抜かれたのか!？」

「流希が抜かれたってどういうことですか?一体何が!？」

「いいから君は操縦に集中するんだ。早く戦闘機を撃ち落として調査を始めるぞ」

「撃ち落とすって……」

背筋が凍った。戦闘機を、人を殺せというのか?

「できませんよ!僕に人殺しをしろっていつんですか!」

「……そうだ」

「嫌です!誰かが死ぬのは嫌だって……誰かが傷つくのは嫌だって

……」

すると鎬木さんはパソコンを折りたたみ、蹴り飛ばすようにシートを外すと右手で僕の襟首を掴む。

「じゃあ君は、MFLなら、動物なら殺しても構わないと言いたいのか!どれも命あるものなのに人が相手なら手のひら返しかな?君のすべきことはそんな薄っぺらいものかな?」

「それは……」

「答えられないならそれまでだ。君はやるべきことをやるしかない。たとえそれが状況に飲まれているだけだとしてもな」

鎬木さんはそう言うのとズボンのポケットから何かを取り出す。宝石のような真っ黒い六角形状の物。けれどもそれはほとんど光沢はなく、黒いただの石のようだ。

「いいか、これにはまだ僕らも解析できてないプロキオンのブラックボックス関することが詰まっている。君のこれを託す」

「そんな……僕に渡しても……」

「僕は意味があるから渡している。さあ、早くハッチをあけろ」

「何をする気です！？ここでハッチを開けたら敵の的じゃ
「いいから開ける！」

怒鳴りつけるように言った。僕はうつむいたままハッチを開ける。
エアロックが外れ、ゆっくりと開く。

「僕はこれから調査に行く。君は囷となつて調査を手伝ってくれ」

「そんな！死ににいくようなものじゃないですか！」

「ああ、だから君が必要なんだ。……男なら誰かのために何かをし
てみせろ」

ハッチが閉じた。楠木さんはニツコリと笑ってピースサインをした。
僕もそれに応える為に必死に涙をこらえてピースサインをした。

眼下の熱源反応はIFFに反応することは無かった。サーマルスコー
プでみるそれは花卉のように美しく舞っている。

「こちらクリムゾン1、誰か生きてたら応答しなさい！」

私は叫ぶようにして無線機に言つて返答を待った。しかし、ノイズ
が聞こえるばかりで何か音声が届くことはない。

舌打ちをしてもう一度スコープの中を覗いた。あの熱源はこちらに
は気づいていない。だとすれば私は一旦退避するのが妥当だ。下手
に突っ込んで撃墜されるなんて新兵のやることだ。

以前、応答はない。ただでさえ寒いロシアの朝だというのに妙な寒
気が私を襲う。

不意に耳を劈くような爆発音が聞こえた。サーマルスコープはその
爆発を無慈悲に真つ赤な色でデータとして表示する。

その赤の中にもう一つの赤があった。人の形をした赤色が。

私はIFFを確認する。クリムゾン02、二番機が炎に飲まれてい
る。

「クソッ、なにやってんのよ……クリムゾン02！応答しなさい！」
「……隊ッ……長……こいつはただの敵じゃ……」

「待つてなさい、今助けに行く！」

足を天に向けた。日の差し込み始めたその空へ。

背景の灰色が一気に山の緑へと移り変わった。体感速度はすでに800kmは超えている。

猛烈なスピードで着る戦闘機をまとった私は飛んでいく。

落下していく最中、一点の赤が見えた。それは花弁、巨大な花弁。蹴り飛ばすように足を下げる。バーニアの噴出される足をむりやりに動かし、急減速する。

ADの軋む音と共に、林にバーニアの青い炎をまき散らして花弁の方へと進んでいく。

「早く捕まりなさい！」

私は目の前にいるクリムゾン02に向かって叫んだ。被弾して操縦不能になった彼のADへと私は機械に覆われた手を伸ばす。

あと、数メートル……

ドカン、と爆発が私の目の前で起きた。差し伸ばした手のひらの上で炎が上がるかのように。

あと少しで味方を助けられる。そう思った矢先に、その花弁から放たれた光弾がクリムゾン02を貫き、燃料に引火した。

私は推進剤を止め、転げ落ちるように地面に落ちた。不思議と痛みは感じなかった。でも、胸の奥に何かポツカリと空いた感じはした。目の前で、助けられた命がなくなるといふのはこんなことなんだと。『他人が死ぬのは嫌なんだよ！』

不意に彼の言葉が再生された。まるでその言葉はここで私の頭で流されるのを待つていたかのように。

「そうね、そういうことね」

私は砂に汚れたADを手で振り払う。わずかに砂埃が立つ。

「とんだ馬鹿ね」

私はそう言つと右手に持ったアサルトライフルのマルチサイトをダットサイトに切り替え、目の前に敵へと向かった。

プロキオンの球体型モニターにはしっかりと人影が映っていた。あの『何か』を起こした元凶だという花に向かって走る鎬木さんの姿が。

鎬木さんは僕に言った。何かをしてみせろと。それが僕に今やるべきことなんだと。

「……行きます！」

怒鳴りつけるように叫んだ僕はフットペダルを押し込んで脚部スラストから推進剤を噴出させた。体を締め付けるようなGが襲った後、なんとも言えない浮遊感と共にその『薔薇』へと向かう。

花卉がゆつくりと回転しながらまとり始めた。中からは抑え切れないほどの光が溢れた。これから行う攻撃の強力さを指し示すように。

花の中心を注視する。網膜に連動してプロキオンは花の中心へとガンレティクルを合わせると僕は夢中になってトリガーを引き、鉛を浴びせる。

体全体を襲う反動がコックピットを揺らし、恐怖と振動とでレバーを震わせる。

それでも僕は恐怖ではないと無理矢理に言い聞かせる。これは武者震いだ、と。

被弾した薔薇はゆつくりと砂埃を上げて倒れ、そのまま光弾を発射した。眩い光が空気を揺らし、草木を焼き尽くす。その振動でプロキオンも怯えるかのように震える。

「良い感じだ大輔くん、そのままアイツの眼を奪っていきな。解析はあと数分で済む」

自動で開いた『音声限定』と表示されたウィンドウと共に鎬木さんが無線でそういった。僕は「分かりました」と受け答えるとすぐさ

ま補助スラスターを点火して姿勢制御モードへと入る。

目の前の花は再び光を放つ。メインエンジンをフル稼働させて左へ薔薇と点対称に動きながらライフルを発射する。バーニアとリコイルショックの2つの衝撃に耐えながら僕は必死でプロキオンを操縦した。

そして、薔薇は黄色い閃光を再び放つ。今度は空に向かって。上空に居たロシアの戦闘機が塵になっていくのが見えて怖くなる。

「大輔くん、あと少し。あと少し踏ん張ってくれ」

「わかってます、今やってます！」

トリガーを引きながらそういった。腕にジーンと衝撃が残る。体がカチコチに固まったようだ。

「あと何%ですか!？」

「7%だ！」

僕が怒鳴りつけるように問うと摘木さんも負けじと大声を張り上げ、キーボードを叩く音をひびかせながら言った。

三度、薔薇が輝き始めた。

ガンレティクルを表示させ、両手でライフルを構えるとプロキオンは自動でスコープの倍率を上げる。

ど真ん中に薔薇を捉える。これで終わりだ。僕のやるべき事は終わる。

途端、激しいノイズが耳元に響く。砂嵐でも襲ったかのように。そしてプロキオンの画面も砂嵐の如く映像が乱れ始める。

「待って、どうなってるんだ。一体何が」

僕が言いかけた時、何かが聞こえた。人の声にも似た何か。この声は聞き覚えがある。

悲鳴のようなその声。男の声。

まさか。と僕は思った。不安が脳内を埋め尽くし、目の前の状況が絶望へと導く。

そして、砂嵐が消えた。

そこに広がっていたのはなんでもない、ただの更地だった。

「待つてよ……どうなってんだよこれ……」

消えている。ただ何も無い。林は燃え盛ることもなく綺麗になくなっている。それと共に鎬木さんも、ロシア軍の戦闘機の姿すらない。あるのは目の前にいる薔薇のみ。まるで嘲笑するかのように花弁を大きく開き、僕の方を向く。

唇を噛んだ。口の中にじんわりと鉄の味が広がる。塩の味もした。泣いていたのだ。

汗ばんだ手は不思議と軽かった。体が勝手に動くかのように。途端、胸元のポケットが光り始めた。僕は急いでポケットからそれを取り出す。先ほど鎬木さんからもらった宝石のようなもの。漆黑であつたそれは仄かに黄色く光始める。

僕がそれをまじまじと見ていると急に画面が真っ赤に染まった。

『DE-S』

初めてプロキオンに乗った時と同じ現象が起き始める。真っ赤に染まった『DE-S』の文字で埋め尽くされる球体型モニターはすぐさま何も見えなくなった。

文字で埋め尽くされ、前は見えず、あらゆることが未開の部分へ僕とプロキオンは踏み入れる。

『DE-S』の文字が吹き飛ばされるように消える。だが、あの時とは何かが違う。

プロキオンの頭部、頬の部分に取り付けられた装甲からフィンが展開する。本来は放熱に使うそれがゆっくりと伸び、その合間から黄金の粒子が放たれる。

後頭部の装甲がリフトアップし、排熱部がむき出しになると装甲がアイセンサーに押し出され、ゴーグルのようなプロキオンの眼は双眼へと変わる。

プロキオンは光をまとった。それはまさに星の如く。

僕は感じていた。これがプロキオンに残された『何か』の遺産。プロキオンの真の姿であり、17年前の何かを止める力、目の前の薔薇を止める力なんだと。

フットペダルをゆっくりと倒した。先ほどとは違い、機動性は比にならない物になっている。

光を撒き散らし、更地に光の種をまくようにプロキオンは薔薇を翻弄する。

ライフルを手放す。砂埃を上げて落下したその代わりに僕はサブウェポンのナイフを取り出す。エアロックが外れ、中に閉じ込められた温かい空気が周りの寒気晒されて白い水蒸気となる。その白いもやの中を切り裂くように現れるナイフを受け止めて僕はそれを流れるように構えた。

加速する。凄まじいGがかかっているにも関わらず、興奮状態に陥った僕はアドレナリンという麻薬で不要な感覚が鈍り、必要な感覚が尖る。

「うおおおおおおッ！」

己の体を動かすようにプロキオンを操る。僕とプロキオンが一体化したような感覚に陥る。

右手に持ったナイフの感触が伝わる。僕はそれを薔薇の真ん中へと向ける。

光を帯び始める花。そんなのどうでもよかった。今の僕は根拠のない希望に満ち溢れその感情のままに動いていた。

金色の粒子をまとった白亜の機体は鉄の刃も持って深紅の薔薇へと加速した。

僅かな推進剤をセーブしながらADを加速させる。花卉の放つ花粉のような粉は地に落ちた途端、草木を辛し、辺り一帯を無へと変える。

こんな敵見たこと無かった。MFLでもなんでもない、巨大な花。美しいその風貌と裏腹にそこから放たれるおぞましい力は私の恐怖にさらに加速させる。

亜寒帯、ロシアの寒さと恐怖によって震える足がバーニアのコントロールを鈍らせる。

凍えきつた指を、今にも引きちぎれそうな指でトリガーを引く。全身が痛かった。心が痛かった。

「うおおおおおおお！！！！」

仲間の弔い。なんてかつこつけたマネは私にはできない。でも、やれることをやらなくちゃならない。だって、アイツも今そうしてるんだから……

途端、脚部の補助スラスタの炎が弱まった。コントロールを失い、落下する。私は攻撃の手を緩めない。芯まで凍えきつた指でトリガーを引いて暴れ馬と化したライフルを片手で必死に抑えて、もう一つの手で空気を掴む。

「メインバーニア出力最大！」

私が叫ぶと音声認識システムが起動してヘッドマウントディスプレイに推進剤の残量が大きく表示される。こっちの残量もあと少ししかない。

バーニアの起動後、手動で消火する。俯せの状態で落下する。そのまま私片手で撃っていたライフルをリロードすると両手で持ち直し、アンダーバレルグレネードに手をかける。

狙えるのは一度きりだと考える。自分に言い聞かせる。

コンピュータは『ストール』だの『トリムアップ』などと私に強要するがそれは全て無視する。

ARマルチサイトに映し出された紅点が赤い花卉へと落ちていく。あと……あと少しだ。これが通じなければどうにも手段はない。でも、やってみる価値はあるはずだ。

支援コンピュータが電子音を鳴らす。紅点が深紅と重なりあう。私ははちきれんばかりの思いをその一発に込め、指が引きちぎれそ

うになるほどトリガーを引いた。

「鍋木からのデータは？」

指令本部へと続く自動ドアを通りながら私はオペレーターに問う。
本部には巨大なスクリーンパネルと無数のコンピュータ。MFLに、
新長野市に関する事のほとんどがここで管理、運営されている。

「現在、送られてきたデータを元にDE-S起動プログラムを構築。
完成後にシリウスヘインポートします」

「鍋木からの通信は？」

本部を見下ろす位置にある司令席へ座る。目の前にある資料に目を
通しながら私は問う。

「それが……」

オペレーターの一人がうつむき加減に言うともう一人が割って入る。
「先程から電波障害が発生してます。通信はほぼ不可能かと……」

「では、衛生で動きをトレースしろ。モニターに映像をだせ」

私がそう言つと事務椅子を回転させながら「了解」と何人物オペ
レーターが答え、キーボードを叩く音が響く。

「大輔……」

息子の名前をつぶやく。いつもいつしよにいけない分、心配性な自
分が生まれる。

もうアイツも一人前の男だ。それに俺の子なんだ。私はそう言い聞
かせて心を沈める。

「司令！」

途端、部下の一人が本部へ息を切らしながら入ってきた。その様子
から何か深刻な事態が起きたのだと推測できる。

「……子供が……子供がVMFLに……！」

「……ということだ、今はAブロックは閉鎖中のはず」

私がそう言いかけた最中、警報がなった。自動でスクリーンパネル

に赤字で『警告、MFL侵入』と表示される。

こんなときに限って……

唇を噛む。生唾を飲み干すと私は司令席に戻り、戦車隊への直通無線を開いた。

確か、確かここだった。

私と西君は人気のないA区画に居た。VMFLの周りは慌ただしさを感じられない。戦車はもう出払っていて他のブロックに現れたMFLの遊撃にあたっているのだろう。

分厚い鉄製の扉。私と大ちゃんが全てに巻き込まれた原因の生まれ場所。この先にあのロボットはいた。

「本当にここから入れるのか？」

「うん……多分ね」

つい数日前なのにずいぶんと前の事のように思える。この先であったこと。急に現れたMFLと戦ったあの時のこと。

西君はこの新長野市の事情に詳しかった。日頃軍部のすきを突いて警戒網をくぐり抜けているだけのことはある。それでもトップクラスの軍事組織、特殊機関であるVMFLの地理情報はない。今朝、長門さんと出会ったのはDブロックの空港。そこから大ちゃんもロシアへと飛び立った。

「じゃあ、開けるぞ」

西君が小声でそうつぶやくと私は小さく頷く。彼はそれを確認すると首を縦に振って扉を押し始める。堅牢なその扉は体全体で押してようやく動き始める。

ズズ、と金属が擦れる重厚な音がしてわずかに開く。

私は西君の方を見た。彼は無言で顎を扉の奥をさして「行け！」と示す。私はそれに首を立てに振って応えようと体を横にして隙間を通る。それからして片手で扉をむりやりに抑えながら西君が入っていく。

る。

この奥、この先にロボットがあつてV M F Lの建物へ続く道があつた。しかし、その前にあるはずのないものがそこにあつた。

細長い尖った獣の顔。三角形の耳を携え、明かりの灯っていないグレーの目で私を見つめる『それ』は犬のようなロボットだった。

大ちゃんの乗ったロボットが居た場所に、全く同じ所にグレーの巨大な犬が佇んでいた。

巨大なスクリーンに格納ブロックの映像が映った。D - 3 格納庫。前にプロキオンが格納され、現在はシリウスの改修の為に使われている場所。

なんでまたそんなところに？ そう思いながら私は映像に目を通す。

「ん？」

何か見たことのある気がした。

「映像を拡大できるか？」

私がそう聞くとオペレーターは「はい、拡大します」と言つて顔の部分へと映像が迫つていく。一瞬、曇つたようにピントの合っていない映像はそれから少しして彼らの顔をはつきりと映しだす。

大輔の、息子の友人。私の友人の娘だった。

よりもよつて……。頭を抱えながら顔を伏せる。世界は狭いものだと思う。

「今すぐ彼らの保護を出せ、今すぐだ」

顔を伏せながら言う。しかし、黒いスーツを着た部下の一人が「しかし、現在M F Lの迎撃で全兵力を使い果たしています。プロキオンとA D 隊さえいけばこつはならないはずですが……」と言つた。私はその言葉に怒りを覚えた。子供一人守れないで何が軍隊だと。座席から立ち上がる。すると黒服の男は「どこへ行かれるのですか？」と聞いてくる。

「彼らの保護へ向かう」

ただそれだけ私は答えた。

今、自分の息子は辺境の土地で自らのやるべき事をしている。だとすれば私のするべきことはなんだ？ 決まっているアイツの帰る場所を守ることに。それが俺が誰かの 息子の為にしてやれる『何か』なんだと。

「待つてください、この区画にMFLが来るかもしれないのです。わざわざ司令自ら行かなくても」

「じゃあ、お前も来るか？」

私は冗談半分に聞いた。苦笑いしながら私は彼の方を向く。プシュツという音がして自動ドアが開いた。

「ええ、お供します」

彼はそう言つとネクタイを直して私の後ろに続いた。

爆煙が空を染め上げた。深紅の花弁はどこにも見えない。舞っているのは赤い破片。

補助スラスタをゆつくりと、少しずつ吹かしながら着陸すると、手でバイザーを持ち上げた。

硝煙の香りがあたりに立ち込めている。

体中が痛い。自分の下に広がる赤い破片が血のように思えるほど痛い。

ライフルのストックを地面に突き立てる。杖のように持って少しだけ休息を取る。

煙が晴れない。もはや煙と呼ぶべきなのか水滴と呼ぶべきなのか私にはよくわからない。

突き立てたライフルを右手に戻す。体の節々がバキボキと音をならす。

途端、何か衝撃のようなものが私を襲った。空気が振動する。煙がそれをよくわからせてくれた。波のように煙が揺れていく。地震ではない、空震だ。

急いでヘッドギアを降ろし、スリープ状態のディスプレイを再起動させる。

12方位で風向きが表示される。東から、この強い空震は来ている。私は首だけ東へ向ける。

確かそっちは探査ポイントがあつたはずだ。だとすればアイツが危ないとも言うのか？

「行かなくちゃ……！」

空震が強くなる。立てないほどの振動、必死に地面にしがみついて私は姿勢を立て直す。

光が見えた。アイツのいる方向、黄金の光が見えた。

残された推進剤。まだだ、まだアイツを助けることぐらい私にはできる。それぐらい余裕だ。

右手に激痛が走る。銃を持ち上げただけでこれだけ痛む。無謀なんだろう。でもそうは思わない、思いたくない。

両手でライフルを持つ。足を肩幅に開く。

歯を食いしばる。そして走りだす。一步、二歩……

そしてスピードのついてきた所で私は思い切りジャンプしてバーニアを一気に点火させる。

尋常ではない痛みが体にのしかかる。

余裕だ。そう言い聞かせる。アイツの手助けなんて余裕なんだって。

私は呆然と立ち尽くした。その犬の目の前で。

今、西君はVMFLへの入り口を探している。私があつたと思っていた通路は警戒状態のせいか鍵がかかっていて向こうから開けてもらわなければはいることができない。

緑色の手すりに手をついて巨大な犬を見つめた釣り上がったグレーの目はどこか寂しげだった。この目もおそらく輝くことができるんだろ。でも、今は出来ない。なぜかは分からないけどそう感じるのだ。

それからして西君が私の方へ歩いてくる。私は「どうだった？」と問うと西君は黙って首を横に振る。

「そっか……」

それでもここはまだ安全なんだろう。私は携帯電話をポケットから出してニユースを確認しようとする。しかし、そもそもインターネツトに接続できず、何もわからずじまいだった。

クラスのみんなは大丈夫なのだろうか？本当に私たちはここに来てよかったのだろうか？

そう考えると不思議と涙が出てきた。それを見た西君は彼なりに気を効かせたのか黙って後ろを向くとどこかへ行ってしまう。

私は声を上げて泣いた。理由はない。ただ泣けてきた。感情が溢れ出した。

すると、私の後方から何かが光った。思わず声を止め、後ろを振り向く。

巨大な犬。ロボットの瞳が金色に光っている。私は手で涙を拭うとその手で瞳に触れる。

吸い込まれそうなその美しい瞳。機械なのにどこか生き物のような瞳。

すると、途端に犬は首をゆっくりと下ろす。そして首の付け根の部分のハッチが開く。

「乗れっていうの？」

私は問う。機械が喋れないことぐらい知ってる。でも、不思議と私にはこの犬の、彼の声が聞こえた。

『乗ってくれ、俺の力を使ってくれ』という声。

私はあふれる涙を必死で拭うと手すりを飛び越え、首元のコックピットへと入る。

「そう、あなた、シリウスって言うのね」

幻聴なのか、それとも真実なのか。区別がつかなくなっていた。

シートに座ると勝手に回りの球体型のモニターに映像が付き始めた。奥で西君が必死で読んでいるのが見える。

私は直感的に今の状況が危ないと思った。西君も、私も。

無理矢理に橋を壊してシリウスを格納庫から出す。

目の前のモニターに赤い点がいっぱい表示される。MFLなのだろう。

「いきます！」

私がそう言つて無我夢中でレバーを倒すとシリウスは四肢を動かし、その体をしなやかに伸ばして走り始めた。

すでに私が来たときには遅かった。目の前にあったのは破壊された格納庫。そして影にうずくまった少年だった。

私は彼に駆け寄ると「何があつたんだ？」と、問う。

すると彼は「急にあのロボットが動き出したんだ。雀野はそれに乗って」と答える。

「シリウスの起動はできたのか？」

私が黒服の男に問うと彼は「おそらく無理かと」と言う。

確かにまだ鎢木のデータを元にプログラムを構築していた最中だ。

たとえ急ピッチでやっていてもここまで早く起動できるようになるのはおかしいだろう。

では、彼女が大輔と同じDE-Sを起動できた人間だとも言うのだろうか？

すると耳に装着したイヤホンに音が聞こえる。

「司令！AブロックでMFLの出現が確認されました！」

それを聞いて私は舌打ちをすると黒服の男に「彼をシェルターへ届

ける」と言って連絡通路へと歩き出す。
最悪の状況が重なりあう。シリウス《光り輝く者》僅かな可能性に
かけるしか無かった。

シリウス。犬の姿をしたロボットに乗って私はレーダーに表された
ポイントへ向かっていた。

MFL、この街を犯す存在。それから街を、大ちゃんの帰る場所を
守れるのなら。そう思うと胸が熱くなった。

私にはどうやってロボットを操作するかなんてよくわからない。前
に、大ちゃんたちと行ったADシミュレーターだけが唯一の知識。
と入っても私自身やったことはなく、二人がやっているのを見てい
るだけ。見様見真似でシリウスを動かす。

細い通路を四本の足で疾走する。煙を上げてガシャンガシャンと金
属音をかき鳴らしながら。

明かりが見える。外へ出るのだ。レーダーの反応が強くなる。この
先に敵がいるんだ。

私は唇を噛み締める。レバーをギュツと握り締めて体に力が入る。
方に力が入って硬くなる。

前方、龍のような黒い細長いものが空を舞っていた。あれが敵、こ
の街を犯す存在。

「あつ、どうすれば……」

いざ、敵が目の前に現れ、動揺してしまう。武器は、シリウスはど
うやってアレに立ち向かえばいいのか。

すると途端、球体型のモニターに勝手にウィンドウが開いて『VM
FL Base』と表示される。

「誰が乗っているかは知らないが今のシリウスに射撃兵装は装備さ
れていない。ナイフを使え、前足に装備されている」

低い男の声だった。聞いたことのある温かい声。大ちゃんのお父さ

んだ。

「分かりました」

私はそう答えると右手側のスイッチを操作してナイフを取り出す。不思議と動かし方は分かった。

エアロツクが外れ、プシュツと音を立てて飛び出したナイフはそのままシリウスの口元へと向かう。

それを加えるとペダルを踏んで加速する。地鳴りを起こして四脚で地面をかける。

上空を飛ぶ龍。襲い掛かるようにそれへ飛び込む。

鋼の刃が龍を切り裂く。しかし、切り裂いたと思ったそれは途端に分散し、そして再結集する。そして龍の形を再び取った。

「どうなってるのよ……通じてないじゃない……」

焦りと不安が私を飲み込む。龍が私の方へ向かう。真っ黒な龍が口を開けてシリウスへと向かう。

私は結局大ちゃんの力になれ無かった。ここまで着たというのに……絶望が襲いかかる。

途端、画面を黒く染め上げた龍は消え、画面は真っ青に染まった。

『DE-S』

青いその文字で染まったコックピットは何も見えなくなった。精神を安定させる色と聞く青だが今の私は全く落ち着かなかった。

コックピットが揺れる。四脚で立っていたシリウスは途端に二足で立ち上がる。私の体がぐんと伸びるような感覚がする。装甲がリフトアップし、拡張していく。前足が変形し腕となり、犬の顔の下にもう一つ、人の顔が姿を表す。

グレーのシリウスは金色の光を放つ。目を始め、拡張した装甲の合間を通るエネルギーラインも金色に瞬く。

犬のカタチから人へと姿を変えたシリウス。口に加えたナイフは手にある。

龍は光に照らされ、その動きを止める。まるで蛇に睨まれた蛙。フットペダルを踏むとシリウスはゆっくりと龍へ歩み寄る。

一歩ずつ、地面を揺らして進む。ナイフを構える。右手に持った鋼の刃は金色に輝いている。

その輝く刃を龍へと挿し込む。言葉に形容できない叫びがこだまし、黒い血液のようなものがドクドクと溢れ出る。

さらにレバーを押し込んでナイフを挿し込む。あふれる黒は更に増えていく。金色に照らされて影のような黒は消える。

ゆっくり、ゆっくりと龍はその姿を縮こませていった。

私とその地についたときにはそこには何も『無かった』

本当に何も『無いのだ』

プロキオンもロシアの戦闘機さえも何一つその姿は無かった。

それからややあつてIFF 敵味方識別装置 に何かが反応した。

ほんの僅かな期待に私はかけるがそこにいたのはAD隊の面々だった。

彼らが生きていた。それは本当に嬉しい。でも、アイツがどこにもいない。

推進剤の切れたADを付けたまま私は徒歩で探し始めた。

それでも、それでもそこにはアイツがいなかった。

第六話 穴の開いた日常

目が覚めた。体の節々が悲鳴を上げている。

ここはどこだ？僕はまだ覚醒しきっていない目をむりやりに見開いてあたりを見渡す。

薄暗い、コンクリートの壁。おかしい、僕は先刻までプロキオンに乗ってあの薔薇と戦っていたはずだ。

ぼやけた視界がだんだんと明瞭になっていく。薄いシーツのかぶせてある診察台のようなベッド。僕はその上から降りると目をこすりながら歩き出す。

何か宛があるわけではない。むしろ何がなんだか分からない。記憶も何も無い。ここはどこだ？

すると途端、この部屋の奥で「ギイツ」と、扉の開く音が聞こえた。カーテンに仕切られた向こう側。僕はまだ寝ぼけている体をたたき起こして物陰へと隠れる。

向こう側で誰かが声を出した。その声は一体何の言語なのか分からない。英語なら中高とある程度は習っているので理解はできる。だとすればそれ以外の言語。くぐもった感じのその言葉はだんだんと僕の方へ近づいていく。

「まずい」と、脳が勝手に判断する。そうしてまるで反射のように僕の体は固いベッドへと入る。

薄いシーツを被せて。寝たふりをする。

カーテンを開く音がした。ガラツ、と力強く、無理矢理に開けた音。僕はその音を聞き、思わず身構えてしまう。

すると誰かが僕の背中をポンポンと叩き、理解のできない言語で話しかける。その声は別に怒っているようにには聞こえない。それでも聞いたことのない言葉というのはどうにも身構えてしまう。

そうして僕が体を縮こませていると男はむりやりにシーツをはがして僕を仰向けにした。彼と目が合う。反射的に『これはまずい』と

判断するも僕の体は蛇に睨まれた蛙の如く動かない。

大柄のその男が僕を睨む。思わず僕は冷や汗を流し、苦笑いをする。彼も笑みを浮かべるとそれも束の間、無表情へと戻る。

これはやばい。僕は一体なんなのかさえわからず殺されるのではないか。死を覚悟して目を瞑る。正確にはそんな覚悟は毛頭ないのだが。

しかし、痛みは感じなかった。目を開くともう一人の細身の長髪の男が彼の腕を持ち、睨みをきかせている。それから長髪の男は男の耳元で何かをボソボソと言うと男はカーテンを閉め、部屋から出ていく。

「すまなかった。彼は客人の歓迎の仕方というのを知らなくてね」流暢な日本語だった。銀髪のその美しい髪と整った顔立ち、到底日本人には見えないその顔から発せられる綺麗な日本語。奇妙な光景だった。

「さて、君が瀬田 大輔くんか？」

彼は僕の隣、ベッドの脇にある椅子に腰掛ける。僕は彼の問いに対して無言でうなずいて答えた。

「結構。まあ、楽にしてくれ。私は君の敵ではない」

「じゃあ、一体何なんですか？僕はプロキオンに乗って戦っていたはずなのに……」

「そうか、あのロボットはプロキオンというのか」

しまったと思って口を抑える。しかしもう遅い。

「別に慌てることはない。君の身柄も、プロキオンも大事に、そしてこの世界の為に使わせてもらう。 DE - S もな」

『DE - S』そのワードを聞いて僕の体は勝手に動いた。ピクリ、と。

「我々は第二の東京 セカンド・シティ の発生を止める為に集まったNGO団体、スヴェズダ。君の力を貸して欲しい」

あれから三日が経った。私、長門流希はVMFLの司令室へ呼び出されている。私の隣にはアイツの幼なじみだという少女、『雀野愛菜』がいる。彼女がずっと動かなかったシリウスを動かしたということと呼び出されたらしい。

信じがたい。そうとしか言い様がない。私は横目で彼女の顔を見た。邪気の無い顔。到底戦う者には見えないその幼さの残った顔。そうか、私は彼女の大切な人を守ってやれなかったのか。

MIA (Missing in action)、つまりは戦死だという判断にはなっていない。しかし、この状況では生きている確率の方が低いだろう。

あの時私が見た爆発、それによってプロキオンも、敵も、そしてアイツも

止そう、これ以上は私を苦しめるだけだ。現実逃避と言われても構わない。今の私は逃げ出したかった。

けれども現実はその簡単に逃がしてくれなかった。私と彼女のいる司令室へ軍服をまとった男が入ってくる。アイツの父親にしてこの司令官。

「君が雀野愛菜ちゃんか。いつも大輔が世話になってる」

彼の第一声はそれだった。そう言って上っ面の会話の後、二人は握手をかわすと司令は自分の席へと座り込む。

「さて、君たちもわかっている通り。私の息子……瀬田大輔が行方不明となった。そして君たちはそれぞれに重要な因子を持っている。長門少尉、VMFLの一員としてではなく大輔を知る者として聞いて欲しい。そして雀野愛菜さん。大輔の幼なじみとして、そして文民の一人と自覚して聞いて欲しい」

そう言って司令は重い頭を抱えながら言う。

「我々はこれより軍部の命令なしで独断でプロキオン、並びにそのパイロットの救出作戦を試みる。協力してもらえるか？」

驚いた。私たちV M F LはM F Lに対する軍事機関ではある。しかしその本体は相模原で実際は防衛省管轄の特殊行政法人といったほうがいい。そんなM F Lが軍部の命令を無視し、独断専行で作戦を実行する。当たり前かもしれないが司令は己と引き換えに息子を助けだすつもりなんだと。

しかしどうやってアイツを助けると言うのだ。アイツがどこに言ったのかは検討すらついていない。プロキオンのI F Fを探しても見つからない。この状況で彼はどうしようと言うのか。

すると、司令室へとつながる自動ドアが開いた。そこからは黒いスーツを着た男が一人。こんな兵士、V M F Lにいただろうか？私がつく考えると男は不意に胸ポケットに手を入れ、何かをとりだす。黒い長方形の物。それは手帳だ。彼はそれをおもむろに開く。桜の代紋の描かれたそれを司令へと突きつけると彼は言う。

「警視庁特務課の佐渡です。話は聞かせてもらいました。この事件、私達も協力させてもらいます」

そう言った彼を見て司令は「そういうことか……」と俯いたままつぶやくと「何か知っているのか？」と問う。

「ええ、おそらくこの事件、我々が追っている国際テロ組織ズヴェズダの可能性が高いと見ます」

国際テロ組織とはまた随分と……私は少し達観した目で見ていた。それは現実逃避によるものなんだろうと思う。すると私の隣の少女、雀野愛菜がその小さな体から小さな声を振り絞る。

「あの……私は大ちゃんを助けだすこと……手伝えるんですか？」

彼女がそう言うとき警視庁の特務課を名乗った佐渡とか言う男は「ああ、もちろんです」と答える。

そうして視線は自然と私へ向けられる。

仕方ない。助けてやろう。上っ面の理由はそうなんだろう。本当は心配している自分がある。でも、素直になれない自分が強くって私は「いいわ、給料分はね」と言った。

ズヴェズダ。そう名乗った彼は足組をして僕の隣に座っている。

「その、あなた達は何なんですか？ズヴェズダって、あなたは何者何ですか？」

「何者……ねえ。私はウラジミール・ロマノフ、正義の味方　とでも言っておこうか」

「その正義に味方が何の用でこんなところに日本人をとらえてるんですか？」

「それは無論、君がDE・Sを起動した者だからだ」

大方予想はついていた。というかそれ以外に僕を捕まえる理由なんて無いだろう。この人はさっき、DE・Sを世界の為に使うと言った。世界の為ってなんだ？MFLを倒すことか？

「君は知っているか？VMFLの本当の目的を？」

「本当の目的？」

オウム返しの如く、僕は聞き返す。

「そうだ、彼らはDE・S、並びに相模原の遺産を独占している。

それは国家の中だけとは限らず、アメリカに対してもだ。おかしいと思わないか？あれほど世界中に世話になった日本がどうしてこれほどの技術を持っていながらそれを独占することができるか、とね。」

「それは……それがMFLに対抗できる手段であって　」

「それと同時に、敵国に対する脅威でもある」

ロマノフは僕が言うのを遮るようにつぶやく。確かにそうだ、そうだけど……。青臭い幻想というやつか、と僕は落胆した。世界はそれほど簡単じゃない。

「だから我々考えた。VMFLには裏があるんじゃないかと、アメリカという強国をも黙らせるものを持っているんじゃないか、と。その結果に導き出される答えは余計な考えをしなくても君にだって

わかるだろう？」

「……17年前の何か、と言いたいんですか？」

僕がボソツとそういうとロマノフは笑顔で「ああ、その通りだ」と違つて首を縦に振る。

「プロキオン、シリウス。何かもう一つ欠けているとは思わんか？何かを促すように。僕を穴へと引きこむようなその話術。

「オリオン座……ベテルギウス……」

こいぬ座のプロキオン。おいぬ座のシリウス。そしてオリオン座のベテルギウス。冬の大三角形を織りなす3つの星。その星の名を持つロボット。では、ベテルギウスとはなんだ？まだプロキオンのような兵器があるというのか？

そう考え更ける途端、視界がブラックアウトした。コンセントを抜かれたテレビのように一気に消える視界。ロマノフが僕を呼ぶ声が聞こえたが僕の体は凍ったように動かなかった。その代わりというのが暗転した視界に何かがうつすら見えた。それは現実なのか幻想なのかはわからない。しかし見えたのだ。禍々しく紅く光る戦士の姿、《オリオン》が。

「で、そのズヴェズダつてのは一体なんなの？」

私、長門流希は警察を名乗る男、佐渡に聞いた。すると佐渡は額に皺を寄せて神妙な面持ちになる。

「それが、よくわかっていないんだ。目的、構成員、そのた全て。全くもって謎。わかっているのは17年前、彼らは東京探査班に協力していたということ。それがどのようなカタチであつたかはわからないけどね」

「じゃあ、つまりは何もわかってないってことじゃない。それでどうやって捕まえるつもりだったの？」

腕組みをして、壁に寄りかかる。私よりも遙に背の高い佐渡を見下すように、皮肉るように私は言った。

「いえ、私達もどうにもお手上げでして。それで瀬田司令がご決断する機会を狙っていたわけです。相模原遺伝子研究所を母体としたVMFLなら何らかの情報を持っているのではないかと」

「悪いがそのような有益な情報は持ち合わせていないな」

司令が割り込んでそう言った。もしわかっていたらこう言い風に私たちを呼び出すこともないだろう。私には上官として命令を下せば良い話だ。まあ、彼女は違っただろうが。

横目で件の彼女、雀野愛菜を見た。あたふたとしたその表情。同い年なのに私とは違った生き方をしてきた。私とは違った責任を持っているんだと思った。

「じゃあ、どうやってアイツ　瀬田特務兵を救助するのですか？」

私は寄りかかった背中を起こし、髪を手ですいた後そう聞いた。だって普通に考えてみる。相手が何者なのか、相手は一体何が目的なのか。全てが分からないというのである。

私の中ではそもそも『ズヴェズダ』という組織の存在と、この佐渡とかいう男の信頼がなくなりつつあった。いや、おそらく最初からそんなものはなく、敵意という先入観で私はそれを見ていたのだろう。それはきつと今の司令に対する態度にも言えることだ。

「それは……」

佐渡は口をすぼめるとその皺の寄った顔を下に向けた。情けない、大人が高校生に言いくるめられるなど。

「では、私たちはこの地球上の至る所を探し尽くせというのですか？」

皮肉たつぷりに私は見下すように言った。まるで自分に酔ってでもいるかのよう。

「長門少尉」

司令が私を止めに入る。でも私はやめなかった。

「手がかりは名前だけ。日本の警察は何をやってるんですか？」

「長門さん……その……」

隣で見えていた雀野も止めに入る。それでも私はだんまりを決め込む佐渡に対して詰め寄る。アイツが消えたというのに、プロキオンが消えたというのに手がかりが無いだって？信じられない、そんなこと。信じられるはずがない。

「長門少尉！」

途端、司令が声を荒らげた。その声で私はようやく我に帰る。感情に身を任せていた醜い自分に、人にあたっていた自分に気づくいたとんだ阿呆だ、私は。感情に任せた行動は己を殺す。ずっと前に小宮山少佐が言っていた。それなのにそれを破ってしまった。アイツはそれほどの存在なのか？

「少尉、雀野さん。二人には大輔が失踪したロシア西部の森林地帯を搜索してもらう。いいか」

「……サー、イエッサー」

つぶやくように返事をする。すると司令が「声が小さいぞ少尉」というので私は怒りも悲しみも全て感情を込めて返事をしてやった。

目が覚めると僕は違うベッドにいた。無論、そこがどこかなんて分からない。まえに目を覚ました時と全く同じ。自覚ある既視感が頭の中でひしめく。

「どうだ、楽になったか？」

誰かが声をかけた。僕はその声に驚いて思わず体をピクンと跳ねさせる。

「そう驚くな、私はお前の味方だ」

長い銀髪の二十歳ぐらいの男。先ほど僕が起きているときに『ウラジミール・ロマノフ』と名乗った彼がそこに居た。

「ここ、どこなんですか？」

僕は俯き、横目で彼を見ながら言う。

「だからそういう敵意の眼差しで私を見るな。それでは己の視界が狭まるだけだ」

「そんなこと聞いてません、僕の味方ならここがどこなのかぐらい教えたらどうですか？」

僕がそう言うのとロマノフは頭を掻いた。長い銀髪がさらりと舞う。

「ここは……そうだな」

ロマノフは僕の後ろを見やる。まるでそれは言い訳でも考える人の典型的パターン。その昔、嘘をつく時、人間はうつむくとか聞いたけど今のロマノフはまさにそれだった。彼への不信任は更に高まる。

「いまは、上海……かな？」

「は？」

僕は思わずその突飛でもない回答に口をあけ、呆然としてしまった。何を言ってるんだこいつは？ 呆れた僕はタオルケットを持って振替える。

しかし、その途端、僕にはひとつの風景が見えた。窓だ。そしてそれが映す街並みだ。

発達した都市。高層ビルを見下ろすような風景。太陽に照らされたビルのガラスが光を反射している。

「あの……ここって本当に……」

「ああ、上海だ。どうだ、これで味方と認めてくれるか？」

「待ってくださいよ！ じゃあここはこれは何なんですか！？」

ドンドン、と僕は床を足で叩いて見せる。

「何でもない、ただの輸送機だ」

ロマノフは涼し気な顔でそう言った。

「……じゃあ、これから何をする気なんですか？」

「何って、日本に向かうに決まってるだろ」

「えっ？」

またも僕は呆気に取られ、口を開けてロマノフを見た。

それからしてロマノフは立ち上がり、その長身を惜しげもなく披露

する。

「君の父上　瀬田大佐の下へ行く」

彼はそう言い放ち、はにかんだ。

「それでそうするんです？　一体何をする気なんです？」

「簡単だ。聞きに行く、全てを」

全てを。全てとはなんだ？　17年前の『何か』、オリオン。あらゆるものが交錯する。

「君は神話でオリオンがどのように描かれているか知っているか？」
急な問いに対し、僕は首を横に振って答える。

「結構。ギリシャではオリオンは海の神、ポセイドンの子供だ。強大な力を持つ彼はそれと同時に、乱暴者だった。だから殺された」
殺された。そのワードだけが僕の耳もとで話されたかのように強烈に響いた。

僕はそもそも神話だとかそういうものに興味はない。ましてや星座だとか宇宙に興味を持ったこともない。そんなこと初耳だった。

「殺されたって、誰にですか？」

「大地母神ガイア。正確には手を下したのはサソリだがな」

それは聞いたことがあった。確か中学の林間学校の時、理科の先生がそう言っていたのを思い出す。

あの時の美しい夜空が脳裏に蘇った。それに比べて今の情景はどうだろう。コンクリートジャングル、もやのかかった都市群。美しいとは言えない。言えたとしてもその方向性は真逆であろう。

「また、神話ではおいぬ座とこいぬ座はオリオンの猟犬とも言われている」

「それがなんだって言うんです？」

僕はそっけなく、そう返す。するとロマノフは、「ロマンがないなあ」と言って首を傾げる。

「もし、オリオンと呼ばれるものが17年前の何かを引き起こした物だしたら君たちは太刀打ちできるか？　そういうことだ」

「そんなの、夢物語です。現実と神話は違う。僕らはMFLを倒す為に戦ってる。それだけです」

ロマノフが鼻で笑う。それはまるで全てを知っているかのように。

「そうでもないぞ？君は空想と神話を履き違えている」

僕は理解できなかった。空想と神話を履き違える。何を言っているんだ？

そもそも神話とは人間が産み出した偶像劇。今更彼は何を

「現実には君を凌駕している……」

途端にロマノフは小さな声でつぶやく。すると何事も無かったかのようにドアの方へ歩いていく。

「日本についたら起こしに来る。それまで君は寝ている」

ボタン、と強く扉を締める。鉄製の重たい扉が風を起こし、ほこりを撒き散らす。

咳払い一つ、僕はタオルケットを掴んでベッドへと横たわった。

その日の夜、私はうまく寝付けなかった。

V M F Lの寄宿舎、多くの兵士達が居住するその片隅に女性専用の区画がある。その女性専用区画の108号室が私の部屋だった。

ルームメイトである整備班の伍長は、今は産休だとかでない。そもそもこのV M F Lで私は最年少の女性パイロットだ。私と気が合うやつってのはそうそういない。ここに来る若者の多くは攻専からきたエリートばかり。楽しいものではない。そういう意味でアイツは私にいい刺激となったのだろう。

布団を頭までかぶる。支給品のスウェットにヘアバンドでまとめた髪。その全体を覆うように。

明日からはまた学校がある。休もうかな？そう考えるも自分のなかのもう一人の長門流希がそれを止める。おかしい、つい最近までは

余裕でサボっていたというのに。

何が私をそうさせているのか？答えは明白だ。

「……」

でも、それを口に出せない。

「とんだ馬鹿ね」

いつもの口癖を小さくつぶやき、私はゆっくりとまぶたを閉じた。

翌日の朝、私は授業が始まる20分ぐらい前に教室についていた。他の生徒といえば部活に出ていて朝から汗をかいているのだろう。窓から見た校庭は忙しく動く生徒が見えた。野球にサッカー、テニスなど……。正直部活になんて見向きもしなかった私は、この学校にどんな部活があるかなんて知らない。

窓際の自分の席に座って教科書を取り出す。攻専ではとくに習ったようなことばかりの授業。退屈だ。それでもアイツがいたときはそれほど退屈じゃなかった。

そもそも私の中でのアイツの存在は何なんだ？戦友、級友。でも、それだけじゃ足りない気がする。言葉には表せない何か。いや、それを現す言葉を知らないだけで、きっとあるのだろう。

私の隣の席、行方不明のアイツの席には花が手向けられているなんてことはない。まだ戦死判定は受けてないからだ。きっとVMFLと政府から何も言わないよう命令されているのだろう。

カバンの中から私は音楽プレイヤーをとり出した。イヤホンを耳につけて、お気に入りの曲を聴く。それでも私の心に空いた空洞が満たされることは無かった。

「えー、つまりこの公式で先程出したXを解いて……教科書のやり方は少々悪い例ですね」

教壇の上に立つ白衣の数学教師。私はそれを耳から耳へと通り過ぎさせていく。

シャーペンを持った右手で頬杖をついて窓の外を眺める。この窓は西側、即ちこの先には数日前に私たちが戦った地、ロシアが広がっている。

スピーカーからチャイムが鳴った。鐘ではなく電子音のチャイムが響いた後、「それじゃ、今日はここまで。しっかり復習してくるよ」に」と教師が言った。

「起立」

日直の生徒が言っ、椅子を引きずる音が響く。私はそれに紛れるようにしてゆつくり椅子から立ち上がる。

「礼、着席」

なんてことのない日常。私は席に着くとカバンから弁当を取り出す。もうお昼なのだ。

緑色のケースに入った弁当。いや、レーションと言ったほうがいいのだろうか。もともと私は料理が得意なわけではないし、訓練やMFLとの戦いで必然的にそのような物に使う余暇は消えてしまう。

休日にはもっぱら寝てしまっているからだ。

すると途端、女子生徒の一人が私に声をかけた。

「どうかした？」と私が問うと彼女は無言で教室の片隅を指さす。

その方向を見ると一人の少女が立っていた。茶色の長い髪を垂らし、小さなお弁当箱を手に持った少女。雀野愛菜。

私は教えてくれた生徒の「ありがとう」とはにかんで礼を言う。それを見た一部の男子生徒達がわめいているがそれは無視して彼女の下へ向かう。

「どうしたのかしら？」

「いや、ちよつとお話がしたくて。……お忙しかったですか？」

「いや、別に」と私は返す。すると彼女はニツコリと笑って「それじゃ、屋上に来ていただけますか？」と言った。

屋上に着くや否や、私は彼女に一つ質問した。「彼がいなくなったけど貴方はどう思ってるの?」と。

すると彼女は「大ちゃんのことですか?」と首をかしげたので私は「そうよ」と言っただけで弁当を広げた。

弁当と言っても軍の栄養供給用スティックだ。カロリーメイトのようなブロックだが、この中にはかなりの栄養素が入っている。これひとつで一日分の脂質、タンパク質、その他もろもろを摂取できるとかで私はこれをほんの少しだけかじった。

「私は心配してないです。約束したんです、大ちゃんは生きて帰ってくる。そしてまた一緒にカレーを食べるって」

その話を聞いて私は少しだけ笑ってしまった。すると彼女は「笑わないでください!」と頬をふくらませていった。

「そうね、それならアイツもかえってくるわよね」

私はそう言っただけでレシーション片手にフェンスへと近づいた。屋上は高いフェンスで囲われていて、そこから出られないようになっていた。まあ、当たり前前の光景だろう。

「あの……長門さんはどうなんですか?」

今度は彼女が問うた。私は「流希でいいわ」と言っただけで話を続ける。

「ただの仲間よ。戦う仲間、戦友ってやつね」

「戦友……ですか?」

彼女は確認を取るように聞いたので私は大きく首を縦に振った。

「これは、私に言うことじゃないんだけどね、私たちは貴方とアイツを巻き込んでしまった責任がある。それに私たちもプロキオンが無くっちゃ街を守るのに支障を来してしまう。だから、アイツは必ず見つけ出す。そして助ける」

決意。硬いその決意を彼女へ向かい、宣言した私は彼女をみた。すると彼女は「私も協力します。大ちゃんの帰る場所を守るのが私の努めですから」と言った。

帰る場所を守る。幼馴染みと戦友。私には私に与えられた任務があ

る。それを全うするだけ。

レーションをかじる。栄養摂取だけを考えられたそれは到底おいしいとは言えない。私は口直しにペットボトルのお茶を飲むと「今度、手料理をご馳走させてよね」と言った。

「解析はどうだ？」

V M F L 本部二号塔、ここは軍事施設ではなく研究施設だ。私、瀬田浩三はシリウスについてのレポートを受け取りに行っていた。

「正直芳しくありませんね」

白衣を着た研究員が言う。「そうか」と返し、私はテーブルの上の資料を手に取ると壁に背をもたれた。

「竊木顧問の集めたデータを元に解析してみました、わかったのは D E - S の起動条件。どうやら遺伝子配列を鍵にしているようです」

「というところ？」

私がそう問うと白衣の研究員は、小さく頷き、パソコンのキーボードを叩く。

「ある特定の遺伝子配列パターンを解析、それがプロキオン、またはシリウスと合致した時、D E - S は起動条件を満たすそうです。それでも今まで D E - S の起動が観測されたのは4回だけですからね、詳しい事を調べるにはまだサンプルが足りないとしたか……」

それを聞き、私は「ふう」と息を吐いた後、腰をあげる。彼の話を聞きながら資料の内容を目で追っていたがやはりそれほど解析は進んでいないらしい。土壇場でシリウスが起動したのはまさに奇跡といえるだろう。

「それで、ロシアにいたあの薔薇に関する情報は？」

「ええ、ちょっと待ってください」

研究員は再びキーボードを操作する。カタカタと小気味良い音が小

さな研究室に木霊す。

「これですね」

カタン、とエンターキーを押し、一つのウィンドウが開かれる。私はその表示された画面を覗き込むように見た。

「^{アイマードレス} 鈴木顧問のデータと衛星からの映像解析、ADの記録を調べた結果ですが、これは東京の すみません、第一級封鎖区画で謎の現象が発生した時と地場形成パターンが酷似しています。『何か』の原因に似ているというより『何か』の原因そのものに近いですね。現段階ではなんとも言えませんが長門少尉のADに^{アイマードレス}付着したサンプルを元に急ピッチで解析中です」

左手で口元を抑えながら、私はその解析データを見る。17年前、私が実際に体験したあの地獄を創りだした張本人。これほど奇妙で美しい。妖艶な姿は私の殺意を掻き立てる。

「司令？」

「ああ、すまない。できるだけ、早く頼む。早急にな」

私はそう言って研究室を後にする。真っ白な自動ドアが開き、グレイの廊下へと出る。すると途端、警報と共にアナウンスが流れた。

『VMFL軍部に所属する全員に通達、コードエラーを発令。直ちに持ち場についてください』

何かがあれば自動で流れるようにプリセットされた警報だった。私は誤作動と思いつつも本部へと向かう。そうして歩き出す途端、胸ポケットにしまった携帯電話が鳴る。急いでそれを取り、耳へと当てる。

「私だ」

そう言うや否や、電話の主、オペレーターが焦り気味に言った。

「司令、早く本部に戻ってください！ズヴェズダがコンタクトをとって来ました！」

その言葉を聞き、私は一瞬冷静さを失った。

昼食中、途端にマナーモードにしておいた私に携帯が震えた。制服のスカートのポケットからそれを取り出す。画面には『V M F L』と表示されていた。

「はい、長門です」

「長門少尉ですか？今すぐ本部に戻ってください、緊急事態です！通信司令部のオペレーターの声だった。私はなんで呼ばれているのか理解できなかった。警報が鳴っていない事から察するにM F Lが現れたということではないだろうし。一体何が起きたというのだ。私はそれを電話越しに問うた。

「はい、今回現れたのはM F Lではありません。ズヴェズダです」
「ズヴェズダ……」

驚いた。本当に居たのだ。だとしたらアイツもそこにいるというのか。

今まで信じていなかったことが現実となり、確信へと近づく。

私はふいに隣の彼女、雀野愛菜を見やった。彼女を巻き込むのはいささか気が引けるが彼女もそれを望んでいるのだろう。

「あの、今私シリウスの起動者といえるんだけど、連れてくるべきかしら？」

するとオペレーターは「出来ればぜひ」と答えた。

携帯を耳から離し、マイクを手で抑えたと私は彼女を見た。

「どうする？アイツを見つける手がかりが見つかったわよ。一緒にくる？」

首をかしげ、顔色を変えずに私はそう問うと、彼女は深く頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6407x/>

閃光のプロキオン

2011年12月1日19時51分発行